

三十年後の世界

海野十三

青空文庫

まんねんゆき
万年雪とける

昭和五十二年の夏は、たいへん暑かった。

ことに七月二十四日から一週間の暑さときたら、まったく話にならないほどの暑さだった。

涼しいはずの信州や上越の山国地方においてさえ、夜は雨戸をあけていないと、ねむられないほどの暑くるしさだった。東京なんかでは、とても暑くて地上に出ていられなくて、都民はほとんどみな地下街ちかがいに下りて、その一週間をくらしただった。

ものすごい暑さは日本アルプスの深い山の中も別あつかいにはしなかった。アルプス山中の万年雪までがどんどんとけ出した。雪せつ溪けいの上を、しぶきをあげて流れ下る滝とも川ともつかないものが出来、積雪はどんどんやせていった。

うばガ谷の万年雪のことは、むかしから一番面積のひろいものとして、よく人に知られていた。それはまるで氷河のようにこちこちに固まった古い雪であったが、それさえこん

どの暑さで両側からとけだし、日に日にやせていった。登山者たちがおどろいたのもむりではない。

「こんなところに流れがあつたかね」

「いや、知らないね。地図でみると、どうしてもここはうばガ谷のはずなんだが？」

「でも、へんよ。地図からはかつて、ここはどうしてもうばガ谷よ。この地図をこらんなさい。ほら、この岩」

「なるほどなあ、あれはたしかに三角岩だ。これはおどろいた。おい君、有名な万年雪が今年はずつかりとけてしまったんだぜ」

その人は、とつぜんことばを切つて、目を皿のように大きく見ひらいた。

「——何だろう、あれは。……あそこを見たまえ、何だかしらないが、大きなまるい球がある。あの沢の曲つたところだ。見えないかい、君たちには……」

彼はおどろきをこめて、前へのりだしながら下手しもてを指さした。

「なるほど。見えるよ。大きな球だ。ぴかぴか光っているね。金属球だ」

「ふしぎだ。とにかくそばへ行ってみよう」

「おいおい、待ちたまえ。あれは危険なものじゃないか」

「そういえば、昔の写真に出ている機雷きざらいみたいな形をしていますわね」

「ふん、機雷に似たところもあるけれど、機雷は海の中にあるもので、こんな山の中にあるはずがない」

四人の登山者は、それから谷間をつたわって、下手へおりていった。みんな何となくおそろしいが、しかし自分たちで発見したものだから、ぜひその正体をたしかめたかった。

ようやくそばへ近よることが出来た。

沢のまん中に、直径三メートルもあると思われる大きな金属球が、でんと腰をすえていた。表面はぴかぴかに金属光沢を放っている。十字にバンドがしてある。アイ・ボルトが何本かうちこんである。一同はそのまわりをまわってみた。

「や、字が書いてある」

たしかに字が書いてある。書いてあるというより、字を酸水素焰さんすいそえんかなんかで焼きつけてあるといった方が正しいであろう。

×取扱注意、扉Aを開け×

それだけのことが書いてある。

はて、この球は一たい何であろう。

冷凍人間
れいとうにんげん

四人の登山者の好奇心は、いやがうえにもえあがった。

もう登山どころでない。このふしぎな金属球の中をのぞいてみないと、承知ができなかった。

「とにかくこの球は、万年雪がとけて、その下から出て来たものだよ。もつと上にあつたのが、ころがりだして、ここまで来て停とまつたんだと思う」

「火星からなげてよこしたものじゃないか。開けると、中から火星人の手紙かなんか入っているんじゃない？」

「火星からじゃないよ。だってこのとおり×取扱注意、扉Aを開け×と、日本文字で書いてあるんだから、これは日本でこしらえたものにちがいない」

「早く、その扉Aというのをあけてみた方がよかないでしょうか」

「そうだ。それがいい。そうしよう」

扉Aというのはどこかと、球の表面をさがしまわった結果、後の方に半ば土にうずもれて×扉A×と書いてあるものが見つかった。土を掘ってみると、扉Aはまるいふたのようなものであった。それにはハンドルがついていて、左へ二十回ねじるように示してあったので、そのとおりにした。

するとそのふたみたいなものが開いた。金属板の上には、やはり薄彫りうすぼになった文字が
つらなっていた。それを読むと、おどろくべきことが書いてあった。

*

この中には小杉正吉こすぎしやうきちという勇敢ゆうかんな少年が冷凍れいとうされている。彼は本年十三歳である。彼は二十年間この中で冷凍生活を続けた後、ふたたび世の中へ出たい希望である。この球を発見せられたる人は、この球が封印ふういんしたるときより二十年以上たっていることをたしかめた後、この少年を冷凍球の中からとりだしていただきたい。それはむずかしいことではない。この底のBとするした金属板を焼ききると、その中には電気のプラグがある。そのプラグへ五十サイクル交流電気を百ボルトの電圧で供給すれば、四十八時間後には、自動的に球がひらいて、小杉正吉少年が出て来るであろう。それまでの四十八時間は、静

かにこの球をおく以外に何も手を加えてはならない。

昭和二十二年八月十三日

*

たいへんな拾い物だ。この球の中には、少年が冷凍されているのだ。二十年たったら、ふたたび世の中へ出て来たいのだという。

二十年どころか、もう三十年もたっている、早く出してやらなくてはならない。しかし人間を冷凍する技術が、今から三十年も前にすでに考えられていたとは、大した発見である。と、登山者の一人であるカンノ博士はおどろいた。

相談の結果、この大きな拾い物は、東京へ持ちかえることとなった。

博士は、携帯無電機を使って、東京へ電話をかけた。五トンぐらいのものぐらくに持ちあがるヘリコプター（竹とんぼ式飛行機）を一台至急しきゆうここまでまわしてくれるように、航空商会の千代田支店に頼んだ。

二十分ほどすると、空から一台のヘリコプターがゆうゆうと下りて来た。頼んだ、のりものであった。カンノ博士たちは、ハンカチーフをふった。

着陸したヘリコプターの貨物庫の中に、金属球を入れた。それから博士たちは客席へ入った。ヘリコプターは間もなく離陸して、東京へ向った。

とちゆう相談の結果、拾った金属球はヤク大学の生理学部の大講堂へ持込み、そこで開くことにきめた。カンノ博士は、その学部の教授だった。

他の三人は博士の友人だったが、婦人は通信技術者、男の一人は音楽家、もう一人は小説家だった。

いよいよ金属球を開く日が来た。

大講堂は大入満員だった。

ここは階段式になっていて、まわりの座席は高く、演壇はまん中であって、どこよりも低く、そこへあがるには地下道からしなければならなかった。問題の金属球は、この演壇の上におかれてあった。そして周囲には偏へんこう光ガラスのついたてがとりまいていた。これは、中からは外が見えないが、反対に外から中はよく見えるものだった。こんな、ついたてを用いたわけは、金属球の中から出て来るはずの小杉正吉少年を、あまりたくさんの見物人のためにびつくりさせないための心づかいだった。

カンノ博士とあと五人の人だけがついたての中に入った。そして金属球の扉Aの中にあつた注意書のとおり、その底をやぶって電気のプラグを出し、それに指定どおりの交流電気を送りこんだ。それはちようど午前十時だった。

その翌々日の午前十時に、みんなが手に、あせにぎっているうちに、その球がひらくように、しずかに四つにわかれた。そして中からかわいい少年があらわれた。小杉正吉君だった。七百名の見学者は、思わず手をたたいてしまった。三十年前に冷凍された少年が、今りっぱに生きかえってあらわれたからだ。この少年は三十年間、氷のようになっていて、年をとることをしなかったのだ。

「待っていましたよ、小杉君。われわれは君を歓迎します」と、カンノ博士がいった。

「わたしたちがお世話しますから、安心していらっしやいね」
スマイレ女史がいった。

かわりはてた銀座

「二十年たったら、世の中がどんなに変っているか、それを見たかったから、こんな冒険

をしたんです」

と、小杉少年は、まわりの人たちに話した。

「ああ、お話中しつれいですが、じつは二十年じやなく、あなたが冷凍されてから三十年たっているのですよ。ことしは昭和五十二年なんですからね」

「おやおや、三十年もぼくは睡っていたのですか」

少年の伯父おじのモウリ博士が、この冷造れいぞう金属球きんぞくきゅうの設計者だったそうなの。日本アルプスの万年雪を掘ってその中へおとしこんだのもモウリ博士の考えだった。その博士は二十年後になってこの冷凍球を雪の中から掘りだしてくれる約束になっていたのに、博士はその約束をはたさなかった。いったいどうしたわけであろうか。正吉のそんな話を、みんなはおもしろく聞いた。そしてモウリ博士の安否あんびはいずれしらべてあげましょう。それはそれとして、まず久しぶりにかかるい食事をなさいといつて、正吉を食堂へ案内して流りゅう動どう食よくををごちそうした。

少年は思いのほか元氣であつた。例の四人組の外ほかに、東京区長カニザワ氏と大学病院長のサクラ女史が少年をとりまいていたが、少年は三十年前の話をいろいろとした。そして三十年後の東京がどんなに変わっているか、あまりに変わっているのだからそれを見物しているう

ちに気がへんにならないであろうかと心配したりした。

「大丈夫です。あたしがついていきますもの。すぐ手あてをしてあげます」

と、女医サクラ博士は、すぐにこたえた。

「ねえ、小杉君。君はまず、はじめにどこを見物したいですか」

と、カンノ博士はきいた。

「そうですね。まず第一に見たいのは、三十年前に、ぼくの住んでいた東京の銀座を見たいですね。同じところを歩いてみたいです」

少年は、なつかしげに銀座の名をいった。

「よろしい。ではすぐ出かけましょう。しかし、あなたは少々おどろくことでしょう」

一同は正吉を連れて出た。

「ここは見なれないところですが、銀座の近くでしょうか」

「さよう。銀座までは三キロばかりはなれています。しかしすぐですよ、動く道路にのっていけば……」

「なんですって。何にのるのですか」

「動く道路です。そうそう、あなたの住んでいた三十年前には、動く道路はなかったんで

しょうね。そのころは電車や自動車ばかりだったんでしょう。今はそんなものは、ほとんどなくなりました。その代りは動く道路がしています。道が動くのです。五本の動く道路が並んでいるのです。昔あったでしょう。ベルトというものがね。あれみたいに動くのです。歩道に平行に五本並んでいて、歩道に一番近いのが時速十キロで動いているもの。次が二十キロ、それから三十キロ、四十キロ、五十キロという風にだんだん早くなります。そしてその動く道路は、どこへ行くか、方向がかいてあるのです。……ほらごらん下さい。これが銀座行きの動く道路ですから」

ようやく外に出た。日光がかがやいていた。それまでは地下にいたことが分った。なつかしい日光、うまい空気！ しかし変だ。

「ここはどこですか。みたことがない野原ですね」

「ここが銀座です。あなたの立っているところが、昔の銀座四丁目の辻のあったところですよ」

「うそでしょう。……おやおや、妙な塔がある。それから土まんじゅうみたいなものが、あちこちにありますね。あれは何ですか」

林と草原の間に、妙にねじれた塔や、低い緑色の鍋をふせたようなものが見える。

「あのまるいものは、住宅の屋上になっています。塔は、原子弾が近づくのを監視している警戒塔です。すべて原子弾を警戒して、こんな銀座風景になったのです。みんな地下に住んでいます。ときどきものずきな者が、こうして地上に出て散歩するくらいです。おどろきましたか」

正吉はたしかにおどろいた。あのにぎやかな銀座風景は、今は全く地上から姿をけしてしまったのだ。

近づく
星^{せいじん}人

「まだ、戦争をする国があるんですか」

正吉少年は、ふしぎでたまらないという顔つきで、案内人のカニザワ区長にきいた。

「やあ、そのことですがね、まず戦争はもうしないことにきめたようです」

「戦争をするもしないも日本は戦争放棄^{せんそうほうき}をしているんだから、日本から戦争をしかける

はずはないんでしょう。もつともこれは今から三十何年もむかしの話でしたがね」

正吉はあのころ新憲法ができて、それには戦争放棄がきめられたことをよくおぼえていた。

「正吉君のいうことはただしいです。しかしですね。その後また大きな戦争がおりかけましてね——もちろん日本は関係がないのですがね——そのために、おびただしい原子爆弾が用意されました。そのとき世界の学者が集つて組織している連合科学協会というのがあつて、そこから大警告を出したのです。それは二つの重大なことがらでした」

「どういふんですか、その重大警告というのは……」

「その一つはですね、いま戦争をはじめようとする両国が用意したおびただしい原子爆弾が、もしほんとうに使用されたときには、その破壊力はとてもすごいものであつて、そのためにわれらの住んでいる地球にひびが入つて、やがていくつかに割れてしまうであろう。そんなことがあつては、われわれ人間はもちろん地球上の生物はまもなく死に絶えるだろう。だから、そういう危険な戦争は中止すべきである——というのです」

カニザワ東京区長は、そう語りながら、ハンカチーフを出して、顔の汗をぬぐつた。おそらく氏は、その戦争勃^{ぼつぱつ}発 一歩前の息づまるような恐怖を、今またおもいだしたからで

あろう。

「で、戦争は起つたのですか、それとも……」

「もう一つ重大なことがらは」

と区長は正吉の質問にはこたえず、さつき続きを話した。

「連合科学協会員は最近天空においておどろくべき観測をした。それはどういふことであるかという、わが地球をねらつてこちらへ進んでくるふしぎな星があるといふことだ。

それは彗星^{すいせい}ではない。その星の動きぐあいから考えると、その星は自由航路をとつていゝる。つまり、その星は、飛行機やロケットなどと同じように、大宇宙を計画的に航空しているのだ」

「へえーッ。するとその星には、やっぱり人間が住んでいて、その人間が星を運転しているんですね」

「ま、そうでしょうね——だからわれわれは、一刻もゆだんがならないといふのです。その星はわが太陽系のものではなく、あきらかにもつと遠いところからこつちへ侵^{しんにゆう}入して来たものだ。そしてその星に住んでいるいきものは、わが地球人類よりもずっとかしこいと思われる。さあ、そういう星に來られては、われわれはちえも力もよわくて、その星^せ

人に降参いじんこうさんしなければならぬかもしれない。そのような強敵を前にひかえて、同じ地球に住んでいる人間同士が戦いをおこすなどということは、ばかな話ではないか。そのために、われわれ地球人類の力は弱くなり、いざ星人がやって来たときには防衛力が弱くて、かたんに彼らの前に手をつき、頭をさげなければならぬだろう。——それをおもえば、今われわれ人類の国と国とが戦争するのはよくないことである。つまり、『今おこりかかっている戦争はおよしなさい』と警告したのです」

「ああ、なるほど、なるほど、そのとおりですね」

「それが両国にもよく分つたと見えてね、爆発寸前というところで戦争のおこるのは、くいとめられたんです。お分りですか」

「それはよかったですね。しかし、そんならなぜ、あのようにたくさんの方の原子弾の警戒塔や警報所や待避壕たいひこうなんかが、今もならんでいるのですか」

正吉には、そのわけが分らなかつた。

「いやあれは、あたらしく襲来するかもしれない宇宙の外からの敵が原子弾をこつちへなげつけたときに役に立つようにと建設せられてあるんです」

「ああ、そうか。あの星人とかいう連中も、原子弾を使うことが分っているのですね」

「多分、それを使うだろうと学者たちはいつていますよ——それに、もう一つああいう防弾設備がぜひ必要なわけがあるんです」

「それはどういうわけですか」

「それは、ですね。わが地球人類の中の悪いやつが、ひそかに原子弾をかくして持っていますね、それを飛行機につんで持って来て、空からおとすのです」

「どうしてでしょうか」

「どうしてでしょうかと、おっしゃいますか。つまり昔からありました、強盗だのギャングだの。今の強盗やギャングの中には、原子弾を使う奴がいるのです。ドーンとおとしておいて、その地区が大混乱におちいると、とびこんでいって略奪りやくだつをはじめます。ですから、そういう連中を警戒するためにも、あれが必要なのです」

そういつてカニザワ区長は、警戒塔を指さした。

「いやあ、三十年後の強盗団は、さすがにすごいことをやりますね」

と、正吉少年はおどろいてしまった。

すばらしい地下生活

区長さんの話によると、人々は地下に家を持って、安全に暮しているが、事件や戦争のないときにはこうして、大昔の武蔵野平原にかえった大自然の風景の中に自分もとけこんで、たのしい散歩やピクニックをする人が少なくないとのことであった。

「じゃあ、前のような地上の大都市というものは、どこにもないのですね」

「そうですとも。昔は六大都市といたり、そのほか中小都市がたくさんありましたが、いまは地上にはそんなものは残っていません。しかし、地の中にぎわいは大したものですよ。これからそつちへご案内いたしましょう」

正吉は、区長たちの案内で、ふたたび地下へ下りた。

地下といえば、正吉は地下鉄の中のかびくさいにおいを思い出す。鉄道線路の下に掘られてある横断用の地下道のあのくらい陰気な、そしてじめじめしたいやな気持を思い出す。また炭坑たんこうの中のむしあつさを思い出す。

だが、区長たちに案内されていった地下街は、まったく違っていた。陰気でもなく、じ

めじめめなんかしておらず、すこしもかびくさくさくない。またむしあついことなんか、すこしもなかった。それからまた、いきがつまるようなこともなかった。

だから、まるで気もちのいい山の上の別荘の部屋にいるような気がし、また気もちのいい春か秋かのころ、街道を散歩しているようでもあった。

「それは、ですね。この地下街を建設するためには、あらゆる衛生上の注意がはらってあって私たちが気もちよく暮せるように、いろいろな施設が備わっているのです。たとえば空気は念入りに浄化され、有害なバイキンはすっかり殺されてから、この地下へ送りこまれます。また方々に浄化塔があつて、中でもって空気をきれいにしています。ごらんやさい、むこうに美しい広告塔が見えますよ。あれなんか、空気浄化器の一つなんですよ」

「ああ、あれがそうなのですか。広告塔と空気浄化器と二役をやっているのですか」

十メートルくらいの高さの美しい広告塔だった。赤、青、紫、橙、黄などのあざやかな色でぬられ、そして、ぐるぐると回転している、目をうばうほど美しい塔だった。

「それから湿度は四十パーセント程度に保たれています。ですから、これまでの地下のようなじめじめめた感じや、むしあつくて苦しいなどということもありません。また温度はいつも摂氏二十度になっていますから、暑からず寒からずです。年がら年中そうなんです

から、服も地下生活をしているかぎり、年がら年中同じ服でいいわけです」

「それはいいですね。衣料費がかからなくていいですね。昔は夏服、冬服などと、いく組も持つていなければならなかったですからね。ちょうど布ぎれのないときでしたからぼくのお母さんは、それを揃えるのにずいぶん苦勞をしましたよ。——ああ、そういうば、ぼくのお母さんは……」

と、正吉は声をくもらせて、はなをすすった。

「どうしました、正吉さん」

と、大病院長のサクラ女史が、うしろからやさしく正吉の顔をのぞきこんだ。

「ぼく……ぼく」

と正吉はいいよどんでいたが、やがて思い切っていった。

「ぼく、急にぼくのお母さんに会いたくなりました。ぼくがあれいとうきゆうの冷凍球の中にはいるとき、ぼくのお母さんは五十歳でした。ああ、それから三十年たってしまったのです。するとお母さんは今年八十歳になったはず。お母さんは日頃から弱かったんです。お母さんは、とても、今まで長生きしているはずはない。ぼく……ぼく……もうお母さんに会えないだろうな」

正吉少年のこのなげきは、たいへん気の毒であった。カニザワ氏とサクラ女史とカンノ博士の三人は、ひたいをあつめて何か相談していたが、やがてカニザワ区長が正吉にいった。

「もしもし、正吉君。われわれに、すこし心あたりがあるんです。うまくいくと、君のお母さんに会えるかもしれませんよ」

「えっ、ほんとですか。しかし母は、もう死んでいますよ」

「いや、そのことはやがて分りましょう。これから町を見物しながら、そちらへご案内してみましよう」

人工心臓

正吉は、区長たちからなぐさめられて、すこし元気をとりもどした。

町を案内してもらったが、なるほどじつにぎやかであり、また清潔であった。昔は、

にぎやかな町ほど、砂ほこりが立ち、紙くずがとびまわり、路上にはきたないものがおちていたものだ。

しかし、この町はほこりは立たず、紙くずはなく、路面ろめんははだしで歩いても足の裏がよごれないように見えた。

町は、天井が高く、路面から三十メートルはあつたろう。そして、その天井は青く澄んで、明るかった。まるで本ものの秋晴れの空が頭上にあるように思われた。

「あの天井には、太陽光線と同じ光を出す放電管ほうでんかんがとりつけてあるのです。その下に紺青こんじょういろ色の硝子板ガラスがはつてあります。ですから、ここを歩いていると昔の銀ブラのときと同じ気分がするでしょう」

「ああ、あれはほんとうの空じやなかったのですか——うん、そうだ。地面の中にもぐつていて、青空が見えるはずがない」

正吉は、うっかり思いまちがいでいたことに気がついて、顔があかくなった。しかし、それほどほんものの秋空に見えるのだった。

区長は、正吉を、りっぱな本屋につれこんだ。奥は住宅になっていた。いわゆるアパートメント式の住宅であった。そのうちの一軒の前に立った区長は、扉をこつこつと叩いた。

すると中から返事があつた。女の声だった。

「あつ、あの声は……」

扉が内にひらいた。家の中から顔を出したしらがあたま白髪頭の老女があつた。

「まあ、これは区長さん。それにサクラ先生に……」

「今日はめずらしい客人をお連れしました。ここにおられる少年にお見おぼえがありますか」

区長にいわれて、老女は正吉を見た。

「まあ、正吉ではありませんか。うちの正吉だ。まあまあ、正吉、お前は どうして……」

老女は、正吉の母親であつたのだ。

「お母さん」

正吉と母親とは抱きあつてうれしなみだにくれました。

「お母さん、よく長生きをしていてくれましたね」

「正吉や。お母さんは一度心臓病で死にかけたんだけど、じんこうしんぞう人工心臓をつけていただいてこのとおり丈夫になったんですよ」

「人工心臓ですって」

「見えるでしょう。お母さんは背中に背はいのう囊のうのようなものを背おっているでしょう。それが人工心臓なのよ」

正吉は見た。なるほど母親は、背中に妙な四角い箱を背おっている。それが人工心臓なのか。正吉は目をぱちくり。

口ひげのある弟

人工心臓は、ほんとの心臓と違って、人間のつくった機械だから、ずっと大きい。だから胸の中にはいらさず背中にそれをくくりつけてある。

胸の中から二本の管くだが出て、この人工心臓につながっている。一方は赤くぬってあり、もう一つは青くぬってある。赤い方は、きれいな血がとおる動脈、青い方は静脈だ、そして人工心臓は、その血を体内に送ったり吸いこんだりするポンプなのである。

昔あったジェラルミンよりもつと軽い金属材料と、すぐれた有機質の人造肉とでこしら

えてあるのだと、専門のサクラ女史が説明してくれた。

「こんなものをぶら下げていると、かつこうが悪くてね。正吉や、お前が見ても、へんでしょう」

と、母親は笑った。

なつかしい母親の笑顔だった。

「かつこうなんか、どうでもいいですよ。その人工心臓の力によって、もつともつと長生きをして下さい」

「お医者さまは、あたしの悪い心臓を人工心臓にとりかえたので、これだけでも百歳までは生きられますとおっしゃったよ」

「百歳とは長生きですね」

「いいえ。お医者さまのお話では、もつと長生きができるんだよ。百歳になる前に、もう一度人工心臓を新しいのにとりかえ、それからその外の弱って来た内臓をやはり人工のものにとりかえると、また じゅみょう 寿命がのびるそうだよ」

「じゃあ、お母さん、そういう工合にすると二百歳までも、三百歳までも、長生きができることになるじゃありませんか。うれしいことですね。お父さんなんか、昭和二十年に死

んじまつて、たいへん損をしたことになりましたね」

「ほんとに面白いことをしました。お父さまももう十五、六年生きておいでになったら、わたしと同じように、ずいぶん長生きの出来る組へは入れるのにねえ。そうすればお母さんは、今よりももつと幸福なだけれど……」

正吉の母は、早く亡なくなった正吉の父親のことをしのんで、そつと涙をふいた。

そのときだった。りっぱなひげをはやした三十あまりになる紳士と、それよりすこし下かと思われる婦人とが、かけこんで来た。

「あ、お母さん。ここへ、兄さんが訪ねて来てくれたんですつて」

「あたしの兄さんは、どこにいらつしやるの」

正吉はその話を聞いて、目をぱちくり。

「おお、お前たちの兄さんはそこにいますよ。ほら、そのかわいい坊やがそうですよ」

母親は正吉を指ゆびさした。

「えつ。この少年が、僕の兄さんですか。ちよつとへんな工合だなあ」

「まあ、ほんとうだわ。写真そつくりですわ。でもあたしの兄さんがこんなにかわいい坊やでは、兄さんとおよびするのもへんですわね」

「正吉や。こつちはお前の弟の仁吉にきちです。またそのとなりはお前の妹のマリ子ですよ」

「やあ、兄さん」

「兄さん、お目にかかれてうれしいですわ」

「ああ、弟に妹か——」

といったが、正吉も全くへんな工合であつた。弟きょうだい妹いに会つたようではなく、おじさ

んおばさんに会つたような気がした。

びつくり農場

思いがけない母親とのめぐりあい、正吉少年はたいへん元氣づいた。見しらぬ世界のまっただ中へとびこんだひとりぼっちの心細さ——というようなものが、とたんに消えてしまった。

「ここからどこへつれていって下さくだるのですか」

と、正吉はカニザワ区長やサクラ院長などをふりかえって、たずねた。

「君がびつくりするところへ案内します。ちよつぱり、教えましようか。日本の新しい領土なんです。ハハハ、おどろいたでしよう」

「日本の新しい領土ですって。それはへんですね。日本は戦争にも負けたし、また今後は戦争をしないことになったわけだから、領土がふえるはずがないですがね」

「そう思うでしょう。しかしそうじゃないんです。君がじつさいそこへ行ってみれば分りますよ」

「近くなんですか」

「いや、近くではないです。かなり遠いです。しかし高速の乗物で行くからわけはありません」

正吉は区長さんのいうことが理解できなかった。土地がせまくなったところへ、海外から大ぜいの同胞どうほうがもどつて来たので、たいへん暮しくくなり、来る年も来る年も苦しんだことを思い出した。中でも一番苦しかったのは食糧だった。

「ああ、そうそう」と、正吉はいった。

「ねえ区長さん。田畑たはたや果樹園かじゆえんはどうなっているのですか。地上を攻撃されるおそれが

あるんなら、地上でおちおち畑をつくってもいられないでしょう」

「そうですとも、もう地上では稲いねを植えるわけにはいかないし、お芋いもやきゅうりやなすをつくることもできないです。そんなものをつくっていても、いつ空から恐ろしいばい菌や毒物をまかれるかもしれないんですからね。そうなるとう安心してたべられない」

「じゃ農作物は、ぜんぜん作っていないのですか」

「そんなことはありません。さつきあなたがおあがりになった食事にも、ちゃんとかぼちやが出たし、かぶも出ました。ごはんも出たし、ももも出たし、かきも出た」

「そうでしたね」

「では、まずそこへ案内しますかな。ちようどよかった。すぐそのアスカ農場でも作っていますから、ちよつとのぞいていきましよう」

アスカ農場だという。地上には田畑も果樹園もないと区長さんはいつている。それにもかかわらず農場と名のつくところがあるのはおかしい。まさか、地中にその農場があるわけでもあるまい。地中では、太陽の光と熱とをもたらすことができなから、農作物が育つわけがない。

「ここです。はいりましよう」

大きなビルの中に案内された。こんな会社のような建物の中に、いったいどんな農場があるのだろうか。

が、案内されて三十年後の地下農場を見せられたとき、正吉はあつとおどろいた。

かぼちやも、きゅうりも、稲も昔の三等寝台のように、何段も重なった棚の上にうえられていた。みんなよく育っていた。

「このきゅうりを見てごらんなさい」

その技師からいわれて、正吉はそのきゅうりをみていた。

「おや、このきゅうりは動きますね。どんどん大きくなる」

正吉はびつくりしたり、きみがわるくなったり、これはおぼけきゅうりだ。

「この頃の農作物は、みんなこのようなり方で栽培さいばいしています。昔は太陽の光と能率のわるい肥料で永くかかって栽培していましたが、今はそれに代って、適当なる化学線と電気とすぐれた植物ホルモンをあたえることによつて、たいへんりっぱな、そして栄養になるものを短い期間に収穫できるようになりました。こんなきゅうりなら、花が咲いてから一日乃至二日なにしで、もぎとつてもいいほどの大きさになります。りんごでもかきでも、一週間でりっぱな実となります」

「おどろきましたね」

「そんなわけですから、昔とちがい、一年中いつでもきゅうりやかぼちゃがなります。またりんごもバナナもかきも、一年中いつでもならせることができます」

「すると、^{ちはい}遅配だの^{きが}飢餓だのということは、もう起らないのですね」

「えっ、なんとかおつしやいましたか」

技師は正吉の質問が分らなくて問いかえした。正吉は、気がついてその質問をひっこめた。まちがいなく五十倍の増産がらくに出来る今の世の中に、遅配だの飢餓だのということが分らないのはあたり前だ。

海底都市

動く道路を降りて丘になっている一段高い公園みたいなところへあがった。もちろん地中のことだから頭上には天井がある。壁もある。その広い壁のところどころに、大きな水

水族館の水槽すいそうののぞき窓まどみたい、横に長い硝子板ガラスばんのはまった窓があるのだった。

その窓から外をのぞいた。

「やあ、やっぱり水族館ですね」

うすあかるい青い光線のただよっている海水の中を、魚の群が元氣よく泳ぎまわっている。こんぶやわかめなどの海藻の林が見え、岩の上にはなまこがはっている。いそぎんちやくも、手をひろげている。

「水族館だと思いますか」

区長さんが笑いかけた。

「よく見て下さい。今、燈火あかりをつけて、遠くまで見えるようにしましょう」

そういつて区長は、窓の下にあるスイッチのようなものを動かした。すると昼間のようにあかるい光線が、さっと水の中を照らした。その光は遠くにまでとどいた。魚群がおどろいたか、たちまちこの光のまわりは幾組も幾組も、その数は何方何十方ともしれないおびただしさで、集つて来た。

「これでも水族館に見えますか」

と、区長がたずね、

「いや、ちがいました。これは本物の海の中をのぞいているのですね」

遠くまで見えた。こんな大きな水族館の水槽はないであろう。

「お分りでしたね。つまりこのように、わが国は今さかんに海底都市を建設しているので
す」

「海底都市ですって」

「そうです。海底へ都市をのぼして行くのです。また海底を掘って、その下にある重要資源を掘りだしています。大昔も、炭鉱で海底に出て出るのもありましたね。

ああいうものがもつと大仕掛になったのです。人も住んでいます。街もあります。海底トンネルというのが昔、ありましたね。あれが大きくなっていったと考えるもいいでしょう」

正吉は海底都市から出かけて、ふたたび上へあがっていった。

とちゆうに停車場があつて、たくさんの小学生が旅行にでかける姿をして、わいわいさわいでいた。

「あ、小学生の遠足ですね。君たち、どこへ行くの」

「カリフォルニアからニューヨークの方へ」

「えっ、カリフォルニアからニューヨークの方へ。僕をからかっちゃいけないねえ」

「からかいやしないよ。ほんとだよ。君はへんな少年だね」

正吉は、やつつけられた。

そばにいた区長がにやにや笑いながら、正吉の耳にささやいた。

「ちかごろの小学生はアメリカやヨーロッパへ遠足にいくのです。この駅からは、太平洋横断地下鉄の特別急行列車が出ます。風洞かざあなの中を、気密列車きみつが砲弾ほうだんのように遠く走っていく、というよりも飛んでいくのですな。十八時間でサンフランシスコへつくんですよ」

「そんなものができたんですか。航空路でもいけるんでしょう」

「空中旅行は、外敵がいてきの攻撃を受ける危険がありますからね。この地下鉄の方が安全なんです。なにしろ巨大なる原子力を使えるようになったから、昔の人にはとても考えられないほどの大土木工事や大建築が、どんどん楽にやれるのです。ですから、世界中どこへでも、高速地下鉄で行けるのです」

「ふーン。すると今は地下生活時代ですね」

「まあ、そうですね。しかし空へも発展していますよ。そうそう、明日は、羽田空港から月世界探検隊が十台のロケット艇ていに乗って出発することになっています」

正吉は大きなため息をついてひとりごとをいった。

「三十年たつて、こんなに世界や生活が変わるとは思わなかつたなあ。こんなにかわると知ったら、三十年前にもつと元氣を出して、勉強したものをねえ」

あとで分つた話によると、例のモウリ博士は月世界探検に行つたまま、遭難そうなんして帰れなくなつてゐるということだ。こんどの探検隊が、きつと博士を救い出すであらう。

宇宙探検隊

正吉は、その日以来、宇宙旅行がしてみたくてたまらなくなつた。

三十年前、やがて月世界へ遊覧ゆうらん飛行ができるようになるよと予言する人があつたら、その人はみんなから、ほら吹きだと思われたことであらう。それが今は、ほんとに出来るのだという。なんとという進歩であらう。

正吉は、そのことを東京区長のカニザワ氏と、大学病院のサクラ女史とに相談してみた。すると二人は、そういうことはカンノ博士にたのむのが一番いいであらうと教えてくれた。

そうだ、カンノ博士。

博士とは、しばらくいつしよにならないが、カンノ博士こそは、正吉少年を冷凍球れいとうきゅうから無事にこの世へ出してくれた恩人の一人で、有名な生理学の権威けんいである。

「ほんとに行きたいのかね、正吉君」

カンノ博士は、人のよさそうな笑顔で、正吉を見もった。

「ぜひ行きたいのです。三十年のながい間、ぼくは眠っていて、知識がうんとおくらせているのです。ですからこんどは、今の世の中で、一番新しいものを見て一足いっそくとびに学者になりたいのです」

正吉は、子供らしい欲望をぶちまけた。

「ほんとに学者になるつもりなら、一足とびではだめだよ。こつこつと辛抱しんぼうづよくやらなければね。宇宙旅行だってそうだ。見かけは花々しく見えるが、ほんとうに宇宙旅行をやってみれば、はじめから終りまで辛抱しんぼう競争きょうそうみたいなものだ。ちつともおもしろくはないよ」

カンノ博士のことばは、じつに本当のことであつたけれど、正吉には、博士が正吉の宇宙旅行を思いとどまらせようと思つて、つらいことばかり並べているのだと思つた。

「ぼくは辛抱するのが大好きなんです。三十年も冷凍球の中に辛抱していたくらいですからね」

「ああ、そうか、そうか、それほどにいうのなら、連れて行ってやるかな」

「えっ、今なんといつたんですか」

正吉はあわててたずねた。カンノ博士は、いよいよニヤニヤ笑顔になって正吉を見ていたが、やがて口を開いた。

「じつはね、私たちはこんど、かなり遠い宇宙旅行に出かけることになった。お月さまよりも、もつと遠くなんだ。早くいつてしまえば火星を追いかけるのだ。そのような探検隊が、一週間あとに出発することになっているが、君を連れて行ってやっていい」

「うれしいなあ。ぜひ連れてって下さい」

「しかし前もってことわっておくが、さびしくなったり、辛抱しんぼうが出来なくなつて、地球へぼくを返して下さい、なんていつてもだめだよ」

「そんなこと、誰たれがいうもんですか」

正吉は、胸を張はつてみせた。

「大丈夫かい。それから火星を追いかけているうちに、火星人のためにわれわれは危き害がいを

加えられるかもしれない。悪くすればわれわれは宇宙を墓場はかばとして、永い眠りにつかなければならないかもしれない。つまり、火星人のため殺されて死ぬかもしれないんだが、これはいやだろう。見あわすかい」

「いや、行きます。どうしても連れてって下さい。たとえそのときは死んで冷たい死骸しがいになっても、あとから救助隊がロケットか何かに乗って来てくれ、ぼくたちを生きかえらせてくれますよ。心配はいらないです」

「おやおや、君はどこでそんな知識を自分のものにしたのかね。たぶん知らないと思つていったのだが……」

カンノ博士は小首をかしげる。

「先生は忘れっぽいですね。この間、大学の大讲堂で講演なさったじゃないですか。—— 今日外科は大進歩をとげ、人体を縫ぬい合せ、神経をつなぎ、そのあとで高圧電気を、ごく短い時間、パチパチツと人体にかけることによつて、百人中九十五人まで生き返らせることが出来る。この生返り率は、これからの研究によつて、さらによくなるであろう、そこで自分として、ぜひやってみたい研究は、地球の極地に近い地方において土葬どそうまたは氷に閉とざされて葬られている死体を掘りだし、これら死人の身体を適当に縫合ぬいわして、電撃生返

り手術を施ほどこしてみることである。すると、おそらく相当の数の生返り人が出来るであろう。中には紀元前何万年の人間もいるであろうから、彼らにいろいろ質問することによって、大昔のことがいろいろと分るであろう。そんなことを、先生は講演せられたでしょう」

「ハハン。君はあれをきいていたのか」

「きいていましたとも、だから、もう今の世の中では、死んでも死につ放しということとは、ほとんどないことで、死ぬぞ、死んだらたいへんだ、なんて心配しないでよいのだと、先生の講演でぼくは分ってしまったんです。ですから連れてって下さい」

「よろしい。連れていってあげる」

「ウワア、うれしい」

正吉はよろこんで、カンノ博士にとびついた。

やっぱり東京の空港から、探検隊のロケット艇は出発した。

艇の名前は、「新月号」という。

新月号は、あまり類のないロケットだ。艇の主要部は、球形きゆうけいをしている。

その外につばのようなものが、球の赤道にあたるにはまっている。そしてこれはどこか風車か、タービンの羽根ていににている。

空気のあるところをとぶときは、このつばの羽根が、はじめ水平にまわり、離陸したあとは、すこしずつ縦たての方へ傾かたむいていって、斜ななめに空を切つてあがる、なかなかおもしろい飛び方をする。

そして、もう空気がほとんどないところへ来ると、このつばの羽根が、球から離れる。そのあとは球きゆうだけとなる。この球がロケットとして、六個の穴からガスをふきだして、空気のない空間を、どんどん速度をあげて進んでいくのだ。

球形の外郭がいかくには、たくさん窓があいている、もちろん穴はあいていない。厚い透明体の板がこの窓にはまっている。そしてこの窓は暗黒の中に美しい星がおびただしく輝いている大宇宙をのぞくために使う。

新月号のこの球の直径は、約七十メートルある。だから両国の国技館のまわりに、でっ

かい円坂をつけたようにも見える。

この新月号は、ただひとり宇宙の旅をすることになっていた。

こういう形のロケットは、今まであまり見受けなかったことで、あぶながる人もいた。学者の中でも、疑問をもっている人があんがい少なくなかった。

しかし、この新月号の設計者である、カコ技師は、安全なことについては、他のどのロケットにもまけないといっていた。そして、それを証明するために、自分も機関長として、新月号に乗り組み、この探検に加わることとなった。

それでは、新月号の艇長は、いったい誰であろうか。これこそ宇宙旅行十九回という輝かしい記録をもつ有名な探検家マルモ・ケン氏であった。カンノ博士は、観測団長だった。スマイレ女史が通信局長であった。女史は、正吉を冷凍から助けだしてくれた登山者中の一人であった。

こうして新月号に乗り組んだ者は、正吉をいれて総員四十一名となった。

「はじめて宇宙旅行をする者は、地球出発後七日間は、窓の外を見ることを許さない」

こういう命令を、マルモ艇長^{ていちょう}は、出発の前に出した。

「なぜ、あんな命令を出したんだろう」

と、正吉はおもしろくなかった。飛行機に乗って離陸するときでさえ、たいへん気持がいい。ましてや、このふうがわりの最新式ロケット艇の新月号で離陸せるときは、さぞ壮^そ観^{うかん}であろう。だからぜひ見たい。

また高度がだんだん高くなって、太平洋と大西洋とがいつしよに見えるようになるころもおもしろかろう。ぜひ見たい。

なぜマルモ艇長は、それを禁ずるのであろうか。しかも一週間の永い間にわたって外を見てはいけないというのはなぜだろう。

正吉は、カンノ博士にあつたとき、その話をした。すると博士はニヤリと笑って、

「フッフ、それは艇長の親心というものだ。艇長は君たちのことを心配して、そういう命令を出したんだ。まもった方がいいね」

と艇長の肩を持った。

「なぜ七日間も、窓から外をのぞいちやいけないんですか、ぼくはその理由を知りたいです」

「それは……それは、今はいわない方がいいと思う。艇長の命令がとけたら、そのとき話してあげるよ」

それ以上、カンノ博士は何もいわなかった。

正吉と同じ不満を持った、初めての宇宙旅行組の者が二十人ばかりいた。それぞれ、そこそ不満をもらしていたが、先輩たちは何も説明しなかった。みんな艇長からかたく口どめされているのだった。

見るなどいわれると、どうしても見たくなるのが人情であった。正吉は、そのうちこっそりと外をのぞいてやろうと決心した。

窓の外には

新月号は夜明けと共に地球をはなれて空中へとびあがったが、その出発の壮観を見た者は、あまり多くなかった。

それから新月号はぐんぐんと上昇を続け、せいそうけん成層圏に突入した。成層圏もやがて突きぬけそうになって高度二十キロメートルを越えるあたりでは、あたりは急に暗くなり、夜が

来たようであった。しかし、本当の夜が来たのではなく空気がすくなくなつて、そのころでは太陽の光がいわゆる乱反射らんはんしゃをして拡散かくさんしないために、あたりは暗いのであった。しかし太陽は上空に、丸く輝いている。それはちょうど月が夜空に輝いているに似ていて、太陽そのものは輝いているが、まわりは明るくないのだ。

そのころ星の群は一段と輝きをまし、黒い幕の上に、無数のダイヤモンドをまき散らしたようであった。

このような光景が、このあといつまでも続くのであった。

昼も夜もない暗黒の宇宙であった。しかし太陽はやっぱりを動いて見える。

大宇宙は、このように静かだ。生きているという気がしない。むしろ死んでいるように見える。それはあたりがあまりに暗黒であるのと、太陽にしても星にしても、暗黒の広い空間に比べて、あまりに小さくて淋さびしいからであろう。

が、もしこのとき、目をうしろにやっただとしたら、どうであろう。彼はびっくりさせられるであろう。

艦長が妙な命令を出したのも、じつはうしろをふりむいてびっくりさせないためであったのだ。

それはちょうど出発後四日目のことであつた。正吉は、窓の外をのぞく絶好の機会をつかんだ。

通路を歩いていると、頭の上で、へんな声をあげた者がある。

何だろうと思つて、正吉は上を見た。

すると、通路の天井の交錯こうさくした梁はりの上に、一人の男がひっかかつて、長くのびているではないか。

「あぶない」

正吉は、おどろいた。放つておけば、あの人は、梁はりの間から下へ落ち、頭をくだくことであろう。早く助けてやらねばと思つた。

他の者をよぶひまもない。正吉は、傍かたわらの柱にとびついて、サルのように上へのぼつていった。木のぼりは正吉の得意とするところだ。

天井までのぼり切ると、あとは梁を横へつたわつて進んだ。まるでサーカスの空中冒険の綱わたりみたいだ。

(早く、早く。あの人が梁から落ちれば、もうなんにもならない)

じつにきわどいところで、彼の身体は梁でささえられている。まるで天秤てんびんのようだ。

正吉は、やつとのもので、その人の身体をつかまえた。つかまえたのと、その人が息を吹きかえしたのとほとんど同時であった。

「あーア」

その人は呻うなった、見るとそれは料理番の若者で、キンちゃんとはばれている、ゆかいな男であった。

「キンちゃん。どうしたの。しつかり」

正吉は、梁のむこうへ落ちて行きそうなキンちゃんの身体を、一所懸命おさえながら、キンちゃんを上げました。

「あッ、こわいこわい、おれは気が変になる。助けてくれッ」

キンちゃんは、両手で顔をおさえ変なことを口走る。

「キンちゃん。おかしいよ、そんなにさわいじや。ぼくは小杉だよ」

「小杉？」

キンちゃんは、ようやく目をあいて、正吉を見た。そしてホッと大きな溜ため息いきをついた。おなじみの正吉の顔を見て、安心したのであろう。

「こんなところで、何をしていたの」

と正吉がきくと、キンちゃんはまた顔をしかめて苦しそうにあえぎだした。

「こわい、こわい、正ちゃん。その窓から外を見ない方がいいよ。気が変になるよ」

「あッ、そうか。君は窓から外を見たんだね。艇長に叱しかられるよ」

正吉はそういつたが、見ると窓のおおいが破れている。キンちゃんが破つたものだろう。正吉は急に外が見たくなった。

「正ちゃん、およしよ。だめだ、外を見ちゃ……」

と、キンちゃんがとめるのにもかまわず、正吉は、とうとう窓から外を見た。

「あッ、あれは……」

正吉の肩が大きく波打っている。顔は、まつさおだ。

正吉は何を見たか。

大きなビルを四、五十あつめたくらいの大さきの、まんまるい黄色に光る球を見たのであつた。

それは地球だ。地球だった。

地球の大きな球が、空間に、つかえ棒もなしにいるところは凄すこいというか、恐ろしいというか、艇長が外を見るなど命令したわけが、やっと分つた。

ていさつ
偵察ロケット

七日以後は窓もひらかれ、外をのぞいてもさしつかえないことになった。そのころ地球は、ずつと形が小さくなり、小山ぐらいの大きさとなったので、恐ろしさが減^へった。もうあれを見て発狂したり、氣絶^{きぜつ}する者もなからう。

地球は小さくなつたが、いよいよ光をまして白く輝く大陸の輪郭^{りんかく}もよく見える。しかし球という感じがだんだんなくなつて、平面のような感じにかわつていった。

「キンちゃん、あれから後、いくど氣絶したの」

正吉がそういつて料理番のキンちゃんをからかうと、キンちゃんは顔をまっ赤^かにして、「あのととき一ぺんこつきりだよ。そんなにたびたびやって、たまるものか。それよりか、今日の夕食にはすごいごちそうが出るよ」

「すごいごちそうというと、お皿の上に地球がのつかっているといた料理かね」

「また地球で、わしをからかうんだね。地球のことはもう棚たなにあげときましよう。さて今夜の料理にはね、牡牛おうしの舌の塩づけに、サラダ菜なをそえて、その上に……」

「雨ガエルでも、とまらせておくんだね」

正吉は、じょうだんをいって、食堂から出ていった。

廊下ろうかの曲り門まがのところ、正吉は大人の人に、はちあわせをした。誰かと思えば、それは藍色あいの仕事服を着て、青写真を小脇こわきに抱えているカコ技師であった。

「あ、あぶない。正吉君、なにを急いでいるのかね」

「いま、食堂ですてきに甘いものをたべて来たので、元気があふれているんです。ですからこれから艇長のところへ行つて探検の話でも聞かせてもらつて来るつもりなんです。艇長のすごい話はこつちがよほど元気のときでないと、聞いているうちに心臓こころがどきどきして来て気絶しそうになりますからね」

「このごろどこでも気絶ばやりだね。だから僕もいつもこうして気つけ用のアンモニア水のはいつた小さいびんをポケットに入れてもっている」

そういつてカコ技師は、透明とうめいな液のはいつている小びんを出してみせた。

「それを貸して下さい。それを持つて艇長のとこへ行つてきますから……」

「だめだよ、正吉君、艇長はいまひるねをしておられる。一時間ばかり、誰も艇長を起すことは出来ないのだ」

「ああ、つまらない」

「つまらないことはないよ、機械室へ来たまえ。これから偵察ロケットを発射させるんだから」

「偵察ロケットですって。それは何をするものですか」

「本艇のために、目の役目をするロケットだ。このロケットには人間は乗っていない。電で波んはそつじゆう操縦するんだ。だからこのロケットはうんと速度が出せる。これを発射して、本艇よりも先に月世界の表面に近づかせる。いいかね。ここまでの話、分るかね」

「ええ、分ります」

「その偵察ロケットには、テレビジョン装置がのせてある。だからそれがわれわれの目にかわって月世界の方々を見る。それが電波に乗って本艇へとどく。本艇ではそのテレビ電波を受信して、映写幕にうつし出す。つまりこれだけのものがあると、本艇の目がうんと前方へ伸びたと同じことになる。たいへんちようほうだ」

「なぜ、そんなことをするんですか」

「これは、もし前方に危険があつたときは、偵察ロケットが感じて知らせてよこす。本艇はさっそく逃げる事ができる。偵察ロケットの方は破壊されてもかまわない。それには人間が乗っていないのだからね」

「音も聞けるわけですね。偵察ロケットにマイクをのせておけばいいわけだから」

「技術上は、そういうこともできる。しかしこの場合、音をきく仕掛はいらない」

「なぜですか」

「だって、月世界には空気がない。空気がなければ、音はないわけだ」

「ああ、そうでしたね」

月の噴火口 ふんかこう

偵察ロケットは、三台も発射された。

それは小型のロケットで、砲弾のような形をしていた。

あと十二時間すると、月の上空へ達するそうである。

この光景はテレビジョンにおさめられ、地球へ向けて放送された。

「月世界つて、そんなに危険なところですか。大地震でもあるのですか」

正吉はカコ技師のそばからまだはなれない。

「もう地震はないね。月世界はすっかり冷えきって、死んでしまった遊星だから」

「じゃあ、強盗でもあらわれるのですか」

「まさか強盗は出ないよ。いやしかし、強盗よりももっとすごい奴があらわれる心配がある」

「なんですか、そのすごい奴というのは……」

「それはね、われわれ地球人類でない、他の生物が月世界へやってくるといううわさがあるんだ。この前にも、ある探検隊員は、それらしい怪しい者の影をみて、びっくりして逃げたという話である。また、ある探検隊員は月世界で行方不明になったが、さいごに彼がいた地点では格闘したあとが残っている。またそこに落ちていた物がわれわれ人類の作ったものではないと思われる。そういうことから、他の遊星の生物がかなり、前から月世界へ来ているのではないか。それなら、これから月世界へ行くには、よほど警戒しな

くはならないということになったのだ」

カコ技師の話は、正吉をおどろかせた。この宇宙は、地球人類だけが、ひとりいばっていられる世界だと思っていたのに、それが今は夢として破れ去り、ほんとうは他の星の生物たちといつしよに住んでいる雑居^{ざっきよ}世界だということが分りかけた。これはゆだんがならない。また、考えなおさなければならぬ。もしや宇宙戦争が始まるようになっては、たいへんである。

正吉は、そんなことを考えていると、なんとなく気分がすぐれなくなった。カコ技師はすぐそれを見てとった。

「正吉君。いやにふさぎこんでしまったじゃないか。とにかく人間は、どんなときにも元気をなくしてしまつてはおしまいだよ。そうそう、いま映画室でパイダのミッキー・マウスの古い漫画映画をうつしているそうだから、行つてみて来たまえ。そして早く、ここへ正ちゃんに戻りなさい」

カコ技師にいわれて、正吉は、そのことばに従つた。

映画はおもしろくて、おなかをかかえて笑つた。すぐそばに、正吉よりもっと大きな声で笑いつづける者がいた。よく見ると料理番のキンちゃんであった。

映画がすむと、キンちゃん、室内競技場へ行こうと、さそってくれた。正吉は、いっしょに行つた。そこには非番の艇員たちが、声をあげて遊んでいた。正吉たちもその仲間にはいつて、バスケットボールをしたり、ビール壇びんたおしをやったりした。そして時間のたつのが分らなくなった。

カコ技師が、いつの間にか正吉のうしろに来ていて、声をかけた。

「例の偵察ロケットがね、さつきから月世界の表面に接せつしよく触したよ。あのロケットが送つてよこすテレビジョンが、いま操縦室の映写幕にうつっているから、見にこない」

「えっ、もう見えていますか。行きますとも」

カコ技師について操縦室へはいっていくと、そこには本艇の主だった人々がみんな集つていた。そして副操縦席のうしろの椅子に腰をおろして計器番の上にはりだした映写幕にうつるテレビジョンを見ながら、意見を交換していた。

映写幕の上には、大きな丸い環かんが、いくつもうつつてそれがゆるやかに下から上へ動いていく。

「いま見えているのは知っているね。月の表面にある噴火口といわれるものさ」

「ああ、本で見たことがあります」

正吉はカコ技師にもたれながら答えた。噴火口のまわりの壁は、ずいぶん高くそびえている。そして右側に、黒々とした影をひいている。

「映写幕の左上の隅のところにあるのがアポロニウスという噴火口だ。その下の方——つまり北のことだが、危難きなんの海という名のついた海のあとさ。ほら、だんだん大きな噴火口が下の方からあらわれてくる……」

大きな噴火口があらわれては、消える。

画面が急にかわった。映写幕の右の方に月の面めんが大きく弧線こせんをえがいてうつつた。ここにはまたもつと大きい噴火口が集っている。

「さっきのと、ちがう別の偵察ロケットのテレビジョンに切りかえられたんだ。今うつっているのは月の南東部だ。まん中へんに見える細長い噴火口がシツカルトだ。直径が二百五十キロもある。壁の一番高いところは二千七百メートル。大きいだろう」

「すごいですね」

白く光る月面を見ていると、なんだか身体がこまかくふるえてくるようだ。

「そのずつと左の方に有名なテイヒヨ山が見える。高さは五千七百メートル。四方八方へ輝条きしょうというものが走っているのが見える」

「ぼくたちは、どこへ着陸するのですか」

「予定では、『雲の海』のあたりだ。そうだ、雲の海は、いま画面のまん中あたりの下の方にある。つまりティヒヨ山から北東の方向へ行つたところにある」

「すごいですね」

「こわくなりやしない？ こわければ上陸しないで、本艇に残っていていいんだよ」

「いいえ、ぼくはだんぜん上陸します。でないと月世界まで来た意味がありませんもの」

ついに着陸

偵察ロケットはだんだん高度を低くし、月面に近づいていった。そしてていねいにいく度もいく度も同じ地域の上空をとんだ。

「大丈夫のようです。別にかわつたものを見かけませんから」

そういつて艇長の方を向いたのは、観測団長のカンノ博士だった。

「うむ。まず、大丈夫らしいね。では着陸の用意をさせよう」

艇長はマイクを手にとりあげて、その用意方を全艇へつたえた。

「さあ、忙しくなつたぞ」

と、カンノ博士は正吉にしばらくの別れを告げて、操縦室から去つた。

着陸の用意は、二十四時間かかった。

いまはカコ技師も、はればれとした顔つきになつて、喫煙室へ来て、煙草をうまそうに吸いながら、だれかれと話しあつている。

「こんどは装甲車を五台出動させることができる。だから上陸班は十分に活動ができると思う」

「装甲車というと、どんなのですか」

「一種の自動車さ。そしてガソリンではなく原子力エンジンで動く。それから外側が厚さ十センチの鋼板で全部包んである」

「じゃあ、戦車ですね」

「戦車は砲をつんでいる。これは砲はつんでいないから、戦車ではない。やはり、装甲車だ」

「なぜこんな乗物を使うんですか。敵がいるわけでもないのでしょうか。なぜそんな厚い装甲がいるんですか」

「それはね、第一に隕石いんせきをふせぐために、これくらいの厚い装甲が必要なんだ」

「隕石というと、流れ星のことでしょう。あんなものはこわくないではありませんか。地上に落ちてくるのは、ほとんどないのですから」

「いや、ところがそうではない。地球の場合だと、空気の層があるから、隕石はそこを通りぬけるとき空気とすれ合って、ひどく高温度になり、多くは地上につかないうちに火となって燃えてしまう。しかし月世界には空気がないから隕石は燃えない。そのまま月の上へ落ちてくる。君たちの頭の上へこれが落ちて来たら、頭が割れて即死そくしだ。だからそんなことのないように装甲車に乗って上陸するんだ。分ったかね」

「なるほど。隕石に気をつけないと、あぶないですね。すると私たちは月世界の上を、この二本の足で歩かないのですか」

「歩くことも出来る」

「だって、隕石が上からとんで来て、大切な頭がぐしゃりとやられたんでは……」

「ひとりで歩く場合には鋼鉄こうてつのかぶとをかぶって歩く。中くらいの隕石ではあたって

「このかぶとでふせぐことができる」

「ああ、そんなものも用意してあるんですね」

「そうだ。それに、本艇には隕石を警戒している隕石探知器というものがあって、隕石が降つてくると、千キロメートルの彼方で早くもそれを感知して電波で警報を発する。この警報はかぶとをかぶって歩いている連中にも受信できるようになっている。だからこの警報を聞いたたら、大急ぎで、反対の側の山かげや地隙ちげきにかくれるとか、または本艇へかけもどつて来れば、一そう安全だ。だから君たち、心配はいらないんだよ」

カコ技師の話は、はじめて月世界へ行く連中を安心させるいい話だった。

だが、月世界と地球とは、いろいろなところにおいて様子がたいへんかわっているのも、まだまだ面くらうことがたくさんあるはずであった。

やがていよいよ、月世界に着陸する時間が来た。

艇は、いま向きをかえ、月面と平行にとんでいる。雲の海附近にかなり広い沙漠帯さばくたいがあつてそこが着陸に便利だと知れていた。

その着陸コースに三度目にはいった時に、艇は前部からガスの逆噴射ぎやくふんしゃを開始し、だんだん速度をゆるめると共に浮力をつけた。そこらは操縦のお手ぎわだった。そしてつい

に見事に雲の海に着陸した。

もし下手な着陸をやれば、月面に衝突して、たちまち艇は一個の火の塊かたまりとなって、全員もろとも消えてなくなるであろう。

「よかった。おめでどう」

「艇長。おめでどう」

艇内には、よろこびのことばが飛んだ。

正吉は、さつきから窓によつて、はじめて見る月世界の景色に魂たましいをうばわれている。

（ああ、ずいぶんすごいところだなあ。高い山、くらい影、木も草もない。これがほんとの死の世界だ。空はまつくらだ。あそこに輝いているのは太陽らしい。ここは雲の海だというが、水いってき一滴ない。こんなところに一週間も暮したら、気がへんになって死にたくなるだろうなあ）

だが正吉は、やがてこの死の国のような月世界で、ふしぎな者にめぐりあい、一大事件の中にまきこまれるなどは、夢にも思っていなかった。

空気服くうきふく

「全員空気服をつけよ」

艇長からの命令が、各室へつたわった。

「さあ、空気服だ。かぶと虫の化けものになるんだ。やっかいだな」

「やっかいだつて。でも、空気ににげられちまって死ぬよりはましだろう」

「もちろん死ぬよりはましさ。だが、空気服はきゆうくつだから、ぼくはきらいさ」

空気服というのは、身体のすっぽりはいる潜水服みたいなもので、あたまにせんすいかぶと潜水兜

に似たかぶとをかぶる。しかし空気服についているかぶとは、前半分ほど透明だ。

空気服の中には地球の上と同じほどの濃こさの空気がはいつている。そしてたえず空気を

きれいにし、不足の酸素を補給する。空気服は特製の人造ゴムまたはけいこうきんぞくばん軽硬金属板で出

来ていて、外界と服の中とは、完全に気密——つまり空気が逃げる穴や隙間すきまがない。

それからこの空気服は、かなりの圧力にたえるように、しっかりした材料で作られている。

空気服の特長は、もつとある。月世界は非常に寒い。そこで空気服の中は、いつも撰^{せつ}氏^し十八度に温められてある。

まだ仕掛がある。空気のない月世界などでは、音を出すことができない。音は空気の波であるから、空気がなければ音は出ないわけだ。そうすると、人と人とは、声で話をすることができない。しかしおたがいに思うことを、相手に通ずることができないと困る。そこで空気服の附属品として無線電話機がとりつけてある。くわしくいうと極超短波^{きょくちゆうたんぱ}を使う無線電話機で、耳のところこに小型のこうせい高声器があり、のどの両脇にマイクロホンきがついて、空気服を着ている人は空気服の中で普通にしゃべれば、それがマイクロホンと器械を通じて電波となり、他の人々の器械に感じ、耳のそばの高声器から、ことばとして聞えるのであった。

空気服には、この外に、かんたんな食事をとり、また水や牛乳やレモン水などをのむ仕掛が、かぶとの内側にとりつけてあり、その外いろいろおもしろい仕掛もあるが、くわしく話しているときりがないから、このへんにしておこう。

そういう便利で重宝^{ちようほう}な空気服を、乗組員の全部がつけろという命令である。これは着陸のとき、万一艇が破損して、艇内の空気が外にもれてしまうようなことがあっても、

この空気を着ていれば平気でいられる。そればかりか、空気を付けている者は、破損の箇所を^{かしょ}応急修理するために活動ができる。だから空気を全員につけさせるのだ。

点検が行われた。空気のつけ方が正しいか悪いかをしらべるのだ。もし悪い者があると、すぐつけ直す。そうしておいてやらないと、万一のとき空気が役に立たない。艇長マルモ・ケンはずぐれた宇宙探検家であるからして、こういう大事なことに、深い注意を^{はら}払うのだった。

空服点検もおわつた。全員異状がない。

「着陸用意。全員^{ぶしよ}部署につけ」

ロケットはだんだん高度を下げていった。一たん艇内にたたみこんであつた翼を出し、これにも噴射ガスが月の面にあたって、反射してくるのをあて、一種の浮力^{ぶりよく}としてはたらかせる。その外にも、ガスを月の面の前後^{おもて}に叩きつけて、スピードのかわるのを、人体にちようにいい程度に調節する。

それでも、かなりのスピードが出ていた。雲の海というところは、やや黒ずんだ沙漠であるが、それが艇の下を洪水のように流れていく。

が、ついに艇は、月の面にふれた。とたんにガスの放出はとめられ、艇は滑走^{かつそう}で前進

する。艇の通りすぎるうしろには、もうもうと砂煙があがって、まるで艇が火災を起したようだ。

やがて艇は停った。その下三分の一が、雲の海の砂にうずもれた状態で、停止した。

「やれやれ。無事着陸したぞ」

「えっ、無事着陸しましたか。月世界へついたんですね」

「もちろんのことさ。ほかのどこへ着陸するものかね」

「ああ、うれしい。さつそく地球にのこして来た家族へ電話をかけたものだ」

「それは間もなく許されるだろう。その前に本艇が着陸した目的の仕事を片づけてしまわねばならない」

「その目的というのは、何ですね」

「今に分るよ。見ておいで」

高級艇員と、こんど初めて月世界旅行について来た若い艇員との間に、こんな話がとりかわされている。

正吉少年の姿が見えない。

いや、いや。装甲車が用意されているそばに、彼は立っていた。

勝手がちがう話

「さあ、乗った」

そういつたのは、カンノ博士だった。観測班長だ。

博士も正吉も、さつきまで着ていた空気をぬいでいた。装甲車に乗る者は、それを着ないでいいのだ。もちろん用心のために持っているが、それは装甲車の中が、気密になっているからである。

装甲車は、みんなで十台あった。一台をのこして、九台が出かけるように命令されている。正吉少年が乗りこんだ装甲車は、一号車であった。いよいよ出かけるときになって、隊長マルモ・ケン氏が乗りこんだ。この一号車長は、カンノ博士だった。

「出発」

号令と共に、空気を着ている艇員が、三重戸の一つを、電気力であけた。空気がも

れないように、戸のあわせ目が複雑な構造になっていた。一号車は中へ進む。すると次の戸があった。

一の戸が閉まる。二の戸が開く。

一号車は、またその中へはいる。すると三の戸につきあたりそうになった。

その三の戸も、開かれた。その外は、まぶしい月世界の風景があった。

一号車は、音もなく、外へゆらゆらと出て行く。そのあとに三の戸が閉った。

一つの装甲車が外に出るまでに、このようなことが数回くりかえされる。

「どうだね、正吉君。月の世界は、あまり気持ちのいいところじゃなからう」

カンノ博士は正吉にいった。

正吉は小窓から外を熱心にながめていたが、

「墓場はかばに日があたっているような風景ですね」

と、いった。

「ははは。おもしろいことをいう。とにかく月世界には、空気が全くまったないから、かすむと

いうことがない。近くの景色も、遠方の景色も、どっちも同じにはつきり見えるんだ。だ

から景色にやわらか味というものがない。春はるさめ雨にかすむとか、朝霧あさぎりの中から舟が出て

くるなどという風景は、この世界には見えない」

なるほど、博士のいうとおりだ。

「先生、いまはなんですか、夜なんですか」

「君はどつちだと思う」

「それが今、分らなくなっただんです。山脈がまぶしく輝いていますね。空はまっくらです。地球の満月の夜の景色に似ているけれど、空気のないところでは、どこでも空はまっくらなんでしょう。するとあのまぶしく光る山脈は、太陽の光で照らされているのか、それとも月の光で照らされているのか、どつちだか分らない……」

「待ちたまえ、正吉君。月の光で照らてされているというのは、へんだらう。だってここは月の上なんだからね」

「ああ、そうか。これはしくじった」

と正吉は声をたてて笑った。

「月の光じゃなくて、地球の光というのが正しいですね。つまりわれわれが今いる月は、太陽か地球かに照らされてるんでしょう」

「そのとおりだ。そこでさっきののだが、今は昼なんだ。だから山脈をまぶしくしているの

は太陽なんだ」

「えッ、やっぱりこれが月世界の昼間なんですか。へんてこですな」

正吉には、いろいろと、めずらしく感ずることばかりだった。

これは後の出来事であるが、正吉は太陽がさっぱり西の山へ沈まないの、ふしぎに思つて、カンノ博士にきいた。すると博士は笑つて、

「二十四時間待つても、太陽は西の山へは沈まないよ、月世界では二週間ぶつつづけに昼間なんだ。そして次の二週間が夜なんだ。夜はこわいぞ。ものすごくて、さびしいよ」

と説明してきかせた。

とにかく勝手がちがうことばかりだ。

もう一つ、正吉が面くらつた話をしよう。それは地球を見たのだ。地球は、地球で見る満月の十倍以上も大きい明るい球きゆうに見えたが、満月と同じ形ではなく、かたわれ月ぐらいのところだった。つまり一部分が、月のために影になつているのだ。

その地球が、さっぱり動かないのであつた。同じ方向の、同じ高さの中天に輝いていて、そこにいつまでもじつとしてるのである。地球から見た月はよく動くから、月から見た地球もさぞ走るだろうと思つたが、そうでないのだ。

ただ、満月——いや満地になったり、三日月——ではない三日地になったり、日に日に影の大きさがちがっていくだけだった。

「ふーン。どうも気がへんになりそうだ、しようがない」

正吉は、そういつて、頭を抱^{かか}えることが初めのうちはよくあった。

料理番のキンちゃんと来たら、その理屈がさっぱりのみこめないのです、正吉ほどにおどろいていなかったようである。

こんな話は後の話だ。さて九台の装甲車は、みんなロケットの外に出た。無電の命令が伝えられる。

と、一号車を先頭にして、九台の装甲車は月の上を走り出した。どこへ行くのであろうか。

それはともかく、こうして走っていると、地球の、どこかの沙漠を夜、走っているのと大して気分がちがわない。

意外な発見

二時間ばかり走って、装甲車は停った。

前に、ひどく高い山が見える。山頂さんちようがきらきらと輝いている。

「どうするんですか。下りるんでしょうね」

正吉がカンノ博士にきいた。

同じ車に乗っている他の人たちの中には、空気服を着はじめた者もあるから、正吉は、ははあと察さつしたのである。

「下りることは下りるが、その前に隕石がとんでいないかどうかをレーダーで調べておく必要がある。今、あそこでやっているのが、そうだ」

なるほど、通信員が、レーダーの電波の反射を見ている。

「あ、一つ来ますよ。すぐ近くまで落ちて来ています」

と、その通信員がいった。

そのことばが終るか終わらないうちに、正吉は思いがけないものを見た。目の前の山の頂きが、とつぜんぱつと赤く光ったのである。

「あッ、隕石が山にぶつかった」

カンノ博士の声。正吉は息をのんだ。

隕石のぶつかつた山頭から雪崩のように隕石が崩れ落ちるのが見えた。どれが隕石やら、月山のかけらやら見分けがつかない。

「まあ、よかつた。ここへ落ちて来なくてよかつた」

カンノ博士は吐息といきをした。

通信員がレーダー観測の結果を知らせて来た。

「隕石はもう見あたりません」

もう大丈夫だ。カンノ博士はマルモ隊長にそれを報告した。

「作業班、出発用意」

作業班の人々は、急いで空気服をつける。カンノ博士もマルモ隊長も、空気服をつけた。正吉少年もつけた。キンちゃんが正吉のそばへ来て笑う。

「人間がイカに化けたようだなあ。銀色の大イカだ。月の怪物があんたを見つけたら、これはごちそうさまといって、手足をむしって、ぱくぱくたべてしまうぜ。こわい」

正吉はふんがいして、両手をキンちゃんの胸どうなか中へまわして、ぎゅうとしめつけた。

「あいたたたた」

キンちゃんは、大げさに顔をしかめて、悲鳴をあげた。

「わる口をいうと、おみやげを持ってかえつてやらないよ」

「えッ、お土産。ああ、そうか。坊や、いい子だからお土産うんと持って来てくんなよ。

ウサギの子でもいいし、ウサギがついた餅でもいいからね」

月の中にウサギが住んでいると思つている、キンちゃんだつた。

装甲車の戸があいた。マルモ隊長とカンノ博士のあとについて正吉は外に出た。

はじめて月の表面に足をおろして歩くのであつた。変な気持だつた。身体がいやにかかるく、今にもふわツと浮きあがりそうであつた。それでもあろう。ここでは重力が、地球の場合の六分の一なのだ。物の重さが六分の一に減つたように感じるのだ。

徒歩の一行は十名ぐらいだつた。

そのあとへ六台の装甲車がついてくる。あと三台は、さっきのところ待っている。その中に正吉の乗つていた一号車もあつた。

一行は、山のすそを左の方へぐるつとまわつていった。よく見ると、道がついていた。かたい岩がけずられて、道跡になつている。その上に黒ずんだ三センチほどの厚さでたま

っている。

もちろん草も生えていなければ、虫が鳴いているわけでもない。自分の足音さえ聞えないのだ。

ぐるつと山のふもとをまわりこむと、目の前に洞門どうもんがあらわれた。

「ああ、あんなものがある」

正吉はびつくりした。洞門の中から、がんじょうな鉄の扉も見える。月の世界にそんな建造物があるとは思わなかった。

そばへ近づくと、ますますおどろきは大きくなった。鉄の扉には、日本文字が、うす彫ぼりで並んでいた。「新につぼん探検隊月世界倉庫第九号」

こんなところに、探検隊の倉庫があったのか。いったい中には、何がはいつているのであろうか。

「おや、これはおかしいぞ。門の扉がこわれている。どうしたんだらう」

カンノ博士の声、電波にのって、正吉の受話器にもひびいた。なるほど、扉の下が大きくひんまげられて、犬くぐりよりもやや大きい三角形の穴があいている。一同はそばへ走りよったが、またつづいてカンノ博士の声。

「おや扉の中に、白骨死体がある。誰だろう。こんなところで死んでいる人間は……」

消えうせた燃料

なぞの人骨はそのままにしておいて、急ぐ方の仕事にとりかかった。

鉄扉へ、装甲車の中にある発電機から、電気が通じられると、洞門の扉はぎいぎいと上へまきとられて、入口はあいた。

四台の装甲車は、その中へはいつていった。カコ技師が若い技術員をさしずして、発電室で電気を起させた。間もなく内部には、あかるく電燈がついた。そして洞穴利用の倉庫がどんなものか、はつきり見えた。

正吉少年は、さつきから空気に身をかため、カコ技師のうしろについて、あつちへ行ったり、こつちへ来たりしていたが、電燈がぱつとついたときに、「おお」とおどろきの声をあげた。

じつに大仕掛の倉庫であった。まるで地底の大工場へ行ったような気がする。各種のエンジンの予備品が、数も知れないほどたくさん、ずらりと並んでいた。その部品も、番号札をつけて、たな棚という棚をうずめつくしている。

「ねえ、カコさん。なぜこんなに、たくさんの機械のいをたくわえておくのですか」

正吉少年はたずねた。もちろん電波を使つての会話だ。

「それはね、宇宙探検の途中で、ロケットがこわれることがよくある。そのとき地球までひつかえすことができない場合もある。だから月の世界に、修理材料や、とりかえ用のエンジンなどをたくわえておけば、地球まではもどれない故障ロケットも月世界に不時着して、故障をなおすことができる。それでわれらの探検隊は、ここに倉庫をおいてあるのだ。ここだけじゃない、月世界には、みんなで十五箇所に倉庫を持っている」

カコ技師は、そういつて正吉に説明をした。なるほど、もつともなことだ。火星へ行き、また金星へとぶようなとき、この世界の月倉庫は、たいへん重大な役割をするわけである。これほどの行きとどいた注意と、用意がなければ、宇宙探検などというそうきよ壮挙は成功しないのだ。なんでもいいから、ロケットは宇宙探検に成功するというわけではないのだ。

「すると、わがマルモ探検隊の乗っているロケットも、ここで故障が起つたんですか」

「いや、故障ではない。われわれの場合は、燃料の一種とするための鉱物を、この倉庫においてあるので、それを取りに来たのだ」

「やっぱりウラニウムみたいなものですか」

「まあ、そうだね」

「地球を出るときにつんで行けばよかったのに、どうしてそうしないのですか」

「地球には、そのルナビウムという貴重な鉱物がすくないのだ。この月の中には、かなりうずもれていると思われる」

ルナビウムとカコ技師は、正吉のまだ耳にしたことのない鉱物の名をいった。

ルナビウムについて、正吉はもつと話を聞きたいと思ったが、そこへ四台の装甲車がしずしずとはいつて来て、カコ技師がたいへん忙しくなったので、もう話しかけられなくなった。

カコ技師は、次の部屋へ通ずるげんじゆうな扉を、一つ一つ開いていった。倉庫は奥の方までかなりたくさんの部屋がつながっているようであった。

ほりだしたルナビウムを貯蔵してある部屋は、一番奥の部屋であった。その部屋へ通ずる扉をカコ技師が開いて、中をのぞきこんだとき、彼は電気にかかったように、からだを

ふるわせた。

「おやツ、これはへんだぞ」

彼がおどろいて棒立ちぼうだになつているところへ隊長のマルモ・ケンやカンノ博士などはいつて来た。

「ほう。これはどうしたのかな」

「ルナビウムがないじゃありませんか。この前、あれだけ集めて、この部屋にいられておいたのに……」

隊長とカンノ博士もびっくりぎょうてんした。カコ技師はそのことを誰より先に気がついて棒立ちになつていたわけだ。

「これは一体どうしたというのでしょうか」

「困つたね。ルナビウムがないと、探検をこれから先へ進めることができない」

「誰がぬすんでいったのでしょうか」

「この部屋から盗むことは、まず不可能なんですがね」

「そうかもしれないが、山ほどつんであつたルナビウムが見えないんだから、ぬすまれたに違いなからう」

「これはどうもゆだんがなりませんよ。さっきの人骨のことといい、洞内の扉がひん曲っていたことといい、今またこの部屋からルナビウムがぬすまれていることといい、これはたしかにみんな関係のあることなんですよ」

カンノ博士は、探偵のようなことを口走った。

そのうしろについて、この場の様子を見入っていた正吉にも、これは重大事件であることがよく分った。

(月世界にもやっぱり、どろぼうやごうとうがいるのかなあ?)

正吉はそう思っただけ息をついたが、そのどろぼうやごうとうよりも、もっとすごい者がこの月世界にいて、この場を荒したことを知ったら、そんな軽いため息だけではすむまい。

鋤こうみやく脈へ前進

さあ、ルナビウムがぬすまれた今、どうしたら一番いいであろうか。

そのことについて隊長は、幹部の人たちを集めて、その場で協議した。

「たいへんな仕事になります、ルナビウムの鉋脈こうみやくのあるところへ行つて、もう一ぺん掘るんですなあ。なにしろルナビウムがなくては、どうすることも出来ませんよ」

「その仕事は、なかなかこんなんだ。それに日数が相当かかるかもしれない。あまり日数がかかることは困る。こんどの探検は、残念だけれど一時中止として、地球へ引返すことにしたらどうでしょう」

隊長は、この二つの案を聞いていて、どっちも正しいと思った。どっちになるか、それを決定することはむずかしい。

「待つて下さい」

とカンノ博士がいった。

「私は、それを決める前に、この事件の真相を調べるのがいいと思いますね。誰がそれをしたか、何のためにしたか、そして倉庫からぬすまれたルナビウムは今どこにあるか。そういう事柄ことがらが分つたら、われわれが今の場合どうすればいいかということが、自然に分るでしょう」

「なるほど、もつともなことだ。しかしカンノ君。事件を調べるのにどの位の日数があるだろうか。それが問題だ」

「それはやって見なければ分かりませんが、私にこれから四時間をあたえて下さい。出来るだけのことをさぐってみます。装甲車を一台と四、五人を私にかしておいて下さい。そしてその間に他の装甲車でもって、ルナビウムを掘りに行って下さい。私は四時間あとにそこへ追いつきますから……」

カンノ博士は、つつましく、そういった。しかし博士は自信をもっているらしかった。「では、そうしよう。人選をしたまえ、カンノ君」

隊長が許した。

「ぼくを、その一人に採用して、ここへ残して行って下さい」

正吉は、まっさきに名乗りをあげた。

「なんだ、少年がここに残りたいのか。よろしい。正吉君は員数外だ。希望なら残ってよろしい」

マルモ隊長は笑いながら、正吉の希望をいれた。

カンノ博士は、そこで五人の人選をした。カコ技師の外は、大した腕のある者はいなか

った。

それが決つて、隊長以下は三台の装甲車に乗り、いそいでこの倉庫第九号から出ていった。あとはカンノ博士ほか六名が残つた。

「われわれは一時、探偵になつたわけです。しつかり頭をはたらかせて、なぞを早くといて下さい。まず人骨の方から調べにかかりましょう」

博士は倉庫の入口の方へ歩きだした。六名の者は、そのあとに従つた。人骨はさっきのとおり洞門のそばに横たわつていた。風化^{ふうか}して、ばらばらになつていた。しかし骨片の位置とその数からして、一人の人間の骨であることが誰にもよく分つた。

「ねえ諸君。こういうことを、おかしいと思いませんか」

とカンノ博士がすいりの糸口をほどきはじめた。

「この人骨は空気服もなんにも着ていないです。すると、行き倒れになつた他の探検隊員だとは考えられないです。もしそうなら空気服ぐらゐは、ちゃんとからだにつけています。ずですからね」

「なるほど」

他の隊員もあいづちをうつた。

「するとこの人骨の主は、自分でこの洞門どうもんの扉をやぶり、中へはいつてこの位置でぜひめいしたとは思われません。つまり何者かが、この人骨の主の死体をこの中へ投げこんでいったとしか考えられないのです。そうは思いませんか」

「いや、それにちがいないと思います。博士のすいりは、なかなかするどいですね」

「すると、何者がこんなことをしたか、扉をあのように曲げることも、ふつうの人力じんりよくではできません」

博士がことばをとめた。誰も意見をいう者がいない。

「ぼくたち探検隊員をおどかすために、こんなことをしたのではないでしょうか」

正吉少年がいった。そんな気がしたからである。

「おどかしのために……」

博士も他の隊員も、正吉のことばに、びくつ、としたようである。

「そうかもしれない。月世界にはいろいろ、とうとい物がある。われらマルモ探検隊だけに独占させてはならないと思つて、われわれを競争相手と考えている者もいるでしょう。その連中が、われわれに対してけいこくをこころみたのかな。それにしても人骨をほうりこんで行くとは、なんとというやばんなやり方だろう」

博士はそういつてまゆをひそめた。

かすかな人名

正吉は、人骨じんこつにもなれ、こわごわながら、そばへよって人骨をながめた。

「おや、ハンカチを持つているぞ、この人骨は……」

骨は白く、ハンカチーフも白いので、今まで気がつかなかったが、ばらばらの人骨の下に一枚のハンカチーフが落ちていたのだ。

この正吉の発見に、カンノ博士たちもおどろいてそばによった。そして博士は骨を横にのけて、ハンカチーフをひろいあげた。そしてひろげたり、裏がえしたりしていたが、

「あッ、ハンカチーフには、名前が書いてある。すみのあとがうすくなっているが、たしかにこれは名前だ」

と、おどろいた様子。

「なんと名前ですか」

「待ちたまえ。ええと、モウリクマヒコと書いてあるらしい」

「えっ、モウリクマヒコですって、ちよつとそのハンカチーフを見せて下さい」

そういったのは、正吉少年だった。

「さあ、よくごらん下さい」

正吉はハンカチーフを見て、顔色をかえた。

「あ、これはぼくのおじさんのハンカチーフです。毛利久方彦もうりくまひこといって、理学博士なんです」

「ああ、あの毛利博士。私も知っていますよ」

とカンノ博士がいった。

「しかし博士は十四、五年前にどうしたわけか行方不明になったままで、その後消しょうそく息を聞いたことはなかった、するともしや……」

博士の声がかすれた。

「すると、この人骨はおじさんの骨なんでしょうか。おじさんは、たしか探検に出かけたまま帰らないといっていましたがこの月世界へ来ていたんですね。しかしおじさんは、な

んというなさけない姿になったものでしょう。おじさん、おじさん

正吉は人骨のそばにひざまづいて、涙をぼろぼろと流した。

これには、他の人たちもげんしゆくな気持ちにおそわれて、もらい泣きをした。

その中でカンノ博士はちらばった人骨をよせあつめ、頭蓋骨の骨片をハンカチーフの上のせていたが、その手をとめて急に目をかがやかした。

「ちよつと、これはおかしいぞ」

「なにがおかしいのですか」

「この人骨はね、君のおじさんの毛利博士もうりはかせではないよ、安心したまえ」

「ええッ、どうして、そんなことが分るんですか」

正吉は、ふしぎに思つて、聞きかえした。

「ちゃんと分るんだ。この人骨は現代の日本人の骨ではない。ずっと古い昔の人骨だ。それも百年前ではない。すくなくとも五万年ぐらい前の人骨だ。骨の形で、そう判定ができるんだ。五万年前の人骨、どうだね。君のおじさんの毛利博士の骨でないことは証明されよう」

「ははあ、そうですか」

正吉をはじめ、聞いていた他の隊員も、ほっと、安心のため息をついた。

「すると、おじさんはまだ生きているのかな。おじさんのハンカチーフが月世界に落ちているとすれば、どこかこの近所におじさんがいるかもしれない」

正吉は、新しい希望をつかんだような気がした。しかしそれは同時に、新しい心配の種類でもあった。

カンノ博士は、ほかのことを考えていた。

（なぞの人物は、なぜ五万年も前の古い人骨をもって来て、洞門の中に投げこんでいたのだろうか。それはどういう考えなんだろう）

なぞは、その外にもあった。五万年まえの人骨がどうして手にはいったのであろうか。それからそれへと考えていくと、ぶきみなおもいに、背中がぞーツと寒くなって来る。

カンノ博士は人骨問題はそれくらいにして、ルナビウムを入れてあった倉庫をもう一度よく調べて、どこかに異常でもあるのではないか、それを発見したく思い、隊員たちに、奥へ行くことを命じた。

が、そのときであった。とつぜん、外に待たせてあった装甲車が発した警報が、カンノ博士たちのところへ届いた。

「なんの警報」

といぶかう折しも、警報信号が消えて、電波にのった運転手の声がひびいた。

「たいへんです。マルモ隊長など九台の装甲車が、トロイ谷のところで、かいぶつの一団にとりかこまれてしまつて、危険におちいつているとの無電がはいりました。すぐこの装甲車へ帰つて来て下さい」

運転手の声は不安にふるえていた。

正に一大事だ。ぐずぐずしてはいられない。カンノ博士は一同をひきいて、洞門の外へとび出した。外はまっ暗だった。黒いうるしでぬりつぶしたような暗黒の世界だ。急に夜のとびらが下りたものらしい。

さて探検隊の前途には何があるのか。その恐ろしき怪物の一団とは何物の群であろうか。

トロイ谷^{だに}

話は、すこし前にもどる。

トロイ谷^{だに}へ向つたのは、マルモ探検隊長のひきいる二十五名の隊員で、九台の装甲車にのつていた。けわしい岩山を、いくたびか上つたり下りたりして、隊員の幹部にはなじみの深いトロイ谷へついた。

一同はしっかりと空気をしめ直し、地上へ下りた。車の中からは、採掘^{さいくつぐ}具がとりだされ、めいめいの手に一つずつ渡つた。これは圧搾^{あつさく}空気ハンマーに似た形をしていたが、原子力で動くものであるから、長い耐^{たい}圧^{あつかん}管もなければ、ボンベもなく、構造はずつとかんたんになっていた。

全く、原子力時代となつた故^{ゆえ}に、交通機関ばかりではなく、土木も建築も製造工業も、たいへん楽になつてしまい、昔の人に聞かせたら、それはでたらめの夢だ、といつて信じないであろうことが、今はごくかんたんにやりとげることができるのだ。

一同は、早い時間のうちに、必要なだけのルナビウムを掘り出す必要があつたから、マルモ隊長までが、その原子力ハンマー^{あやつ}を操つて、ルナビウムを掘りにかかつた。

さいわいに、この前掘つた旧坑が、そのまま残つていて、ルナビウム鉱は、青白く光つていたので、すぐに仕事にとりかかれた。全員は夢中になつて働いた。

それがよくなかった。

こういう場合、やっぱり監視員を立たせておくのがよかったのだ。全員が掘っているため、彼らは自分たちの様子をうかがっている異様ないでたちの一団がそば近くにいることに気がつかなかった。

その異様ないでたちの一団は、トロイ谷を見下ろす峰々から、そつとマルモ隊を見まもっていた。

彼らは、全身を甲虫のようなもので包んでいた。頭や両手、両足のあるところはマルモ隊の人々と同じであったがしかしそれは、マルモ隊員がつけている空気服みたいにすんなりとしたものでなく、わら人形のからだに鉄板てつばんをうちつけたような感じのするものだった。そしてその鉄板は、横へ長いものが重なり合っていると見え、甲虫かぶとむしのからだのようであった。

その頭部は、しいの実のように、大部分は円筒形であるが、上は、しいの実のようにとがっていた。そしてまん中あたりに、目の穴ではないかと思われるものが二つあった。

それが目だとすると、狐きつねの目のようにつりあがっているといわなくてはならない。

そういう異様ないでたちの一団が、みんなでかれこれ四、五十名も、峰々から下をうか

がっているのであった。太陽の光が、彼らの頭やからだの側面を、くつきりと照らし出していた。

とつぜんあたりが暗くなった。

太陽が没した^{ぼつ}のである。そして夜が来たのだ。

月世界においては、空気がないために、地球上の日暮のように、じわじわ暗くなるようなことはなく、いきなり暗くなる。たそがれのうす明りなどというものはなく、いきなり闇がおとずれるのだ。

日の暮れるのを、異様な一団は待っていたようである。暮れると同時に、異人^{いじん}の中から一人が立ち上った。と、彼のからだ^{からだ}がほたるいかにように光った。全身に、光の点々があちらこちらにあらわれ、それが明滅^{めいめつ}する。

と、そのそばにいた他の異人が、またすつと立ち上って、全身をほたるいかにように光らせる。

間もなく、異様な一団の全部が、みんな自分のからだを気味わるく光斑^{こうはん}で明滅させるようになった。

すると最初^{はじめ}にからだを光らせた者が、急に光の明滅をとめた。そのかわり彼の首の下

ところに、光の輪が出来た。それはもう明滅しない。彼は峰を越して、そろそろと下りはじめた。他の異人たちも、いつしか同じように、首の下だけに光の輪をこしらえ、頭目らしい者のあとについて斜面を下っていった。彼らの動作は、いかついからだのわりに身がるに見えた。

一方、マルモ探検隊の方は、急に日が暮れたものだから、一同はそれぞれ空気兜のひたいのところにつけてある電燈をつけた。これがつくつくと、すぐ正面にあるものには光があったつて、明るく見える。

それから、九台の装甲車のヘッドライトを全部つけて、ルナビウムの野天掘りの坑区を照らさせた。そして仕事をすすめたのであった。そこへとつぜん、どどどどとすごい地ひびきをさせてあらわれた異人の群だ。口もきかずに探検隊員めがけて組みついた。

「あッ何者だ」

「なにをするツ。あ、隊長。あやしい奴です」

「らんぼうするな、しかたがない。隊員はこつちへ固まれ。そしてらんぼうする相手に反抗しろ」

マルモ隊長は、ついに争闘を命令した。

このらんぼうなる異人の一団は、何者であろうか。

大暗闘^{だいあんとう}

なにしろその異人^{いじん}たちはなかなか力があつて、マルモ探検隊員は圧迫されがちであつた。その上に人数も相手の方が倍ぐらい多いのである。形勢はよくない。

隊員たちは武器を持つていないわけではなかつた。だがマルモ隊長は、それを使うことを命じなかつた。隊長としては、出来るだけ平和的手段でもつて事をかたづけられたからである。だが、困つたことに、相手とはことばが通じない。電波を出して、

「もしもし、君たち、らんぼうは、よしたまえ。話があるなら聞きますよ」と呼びかけても、相手はさっぱり感じないのであつた。

その上、相手は力がある。マルモ隊長は、隊員を一つとところにあつめて円陣^{えんじん}をつくり、まわりからおどりかかつて来る相手めがけて、そのへんにころがつている大きな岩石をな

げつけさせた。そうして相手を近づけないようにするためだった。

月世界の上では、同じ大きさに見える岩がんせき石でも、地球の上で感ずる重さの六分の一にしか感じない。だから大きな岩石を隊員はかるがると持ちあげて遠くまでなげとばすことが出来た。

ところが異人たちは、それには閉へいこう口せず、遠まきにして目を光らかせ、すきをみては、とびこんで来た。岩石をなげつけられても、けがをして血を出すようでもなかった。

「ははあ、こつちが疲れるのを待っているのだな」

マルモ隊長は、そう気がついて、どきんとした。なにしろ相手は、ますます活かつぱつ発にあばれてみせるのだった。

そのうちに、相手の一部が、場所をかえて、装甲車の方へ近づいていった。

「あ、装甲車をうばわれては、たいへん」

マルモ隊長はおどろいて、隊員の半分をさいて装甲車の方へ急行させた。

その人たちは、装甲車の中にはいつて、それを運転して走りだした。すると異人たちは、それを追いかけた。平地なら装甲車はどんどん走れるが、ここはトロイ谷だにである。道はごくぼこしている上、どっちへ走つてもすぐ崖がけにつきあたりそうになる。そうなるとスピー

ドが出せない、いつの間にか装甲車の上に異人たちが三、四人ずつのつて、天井をこわそうと、大きなこぶしをふりあげて、がんと叩く。そこを叩きわられてはたいへんだ。

上にのつている異人たちを、銃でもつて射ちおとしたいと思つたが、上にのつているのでは射ちようがない。おまけに夜の闇は深く、相手の姿をしかと見つけるのも容易なことでではなかつた。

(これは手おくれとなつたかな。もつと早く、武器をとつて相手をおっぱらうのがよかつたかな)

隊長も、さすがに暗い気持ちになつた。

たしかに手おくれに見える。このままでは、一同は、異人群のために捕虜になるか、うち殺されるかのどつちかだ。

ああ、重大なる危機来る！

そのときだつた。とつぜん異人たちがさわぎだした。装甲車の上にいた異人が四人、五人、風にさらわれたように吹きとばされたのである。とまたつづいて四、五人が、下にもんどりうつてつきおとされた。

「や、カンノ君が、かけつけてくれたぞ。カンノ君は機銃きじゅうで異人たちを射っているそう

だ」

マルモ隊長の受話器にも、他の隊員の受話器にも、カンノ博士の声はいつて来て、一同をあげました。

カンノ博士と正吉少年と、その他に三名の隊員が、装甲車の上から、異人たちにもうれつな機銃の射撃をおくっていた。他の一人の隊員は、その装甲車を操縦した。ヘッドライトは消して近づいたので、異人たちは、ふいをくらった形だった。

この機銃は、普通のように金属の弾丸を射出す機銃ではなかった。これに使っている弾丸は、銃口から射出されると同時に、その弾丸の中で摂氏五百度の熱を発生するようになっていた。しかもこの弾丸は、この熱の発生と共に弾丸の外側がぐにやりとしたゴムのように軟化し、あたった物にべったりと付着するのであった。そうして、叩き落とそうとしても離れないのだ。

しかし二時間たてば、熱も消え、ぼろりと落ちる。——これは熱弾ねつだんというが、別に

「お灸きゆうの弾丸」ともいわれるものであった。相手の生命をとるといほど危険なものではなく、二時間ばかり相手を熱さになやませるだけだ。つまりこの弾丸の命中したものは二時間お灸をすえられているようなもので、従って、力なんか出せない。この熱弾の中には、

二種の薬品がはいっていて、発射されると同時にこの二つが作用して、あの高熱を発するようになっていなのだ。

そのような熱弾をくらった異人たちは、びっくり仰天。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

「わあ、あつ。助けてくれ」

とでもいうかのように、目を白黒、からだをゆがめて大地をころがり、どことも知れず、闇の中にみんな姿を消してしまった。

げっしん
月人の説

マルモ隊長をはじめ、救われた人々は、大よろこびであった。

カンノ博士や正吉たちをとりまいて、感謝のことばをおくった。

「あんなおもしろいことは、今までになかったですよ。あいつらは、今もなお、お灸きゆうをか

らだにくつつけて、『あつい、あつい』と悲鳴を挙げているんだと思うと、おかしくておかしくて……」

そういつて笑いこける正吉少年だった。

みんなも笑った。

「熱弾が、こんなところで最初の手がらをたてようとは、思わなかったねえ」

と、この熱弾機銃の発明者であるカンノ博士も、にやにや笑っていた。

「さあ、急いでここを引揚げよう。ああいう敵があると分ればぐずぐずしてられない。

みんな急いで装甲車へ乗れ。そして急ぎ本艇へかえるのだ」

マルモ隊長は、引揚げを号令した。

掘りだしたルナビウムは、必要量の三分の一にすぎなかったが、今はそれがまんするほかなかった。一同は前のおり装甲車に分乗し、急いでトロイ谷だにをはなれた。

一号車の中で、マルモ隊長を中にして、カンノ博士などの幹部や正吉が、今日とつぜん現われた怪しい相手について、意見をのべあった。

「地球をくいつめた強盗団の一味ではないでしょうか」

「彼らはみんなばかに力が強かったですよ。そしてからだもずっと大きく見えた」

「すると何^{なに}国^{こく}人^{じん}のギャングかな」

「いや、あれは、われわれの世界の人間ではないと思う」

そういつたのは、マルモ隊長だった。

「地球をくいつめた強盗団ではないとおっしゃるのですか」

「うん。早くいえば、月人だと思う。つまり月世界に住んでいる人間なんだ」

「それは、おかしいですね。月は死の世界で、冷^ひえきつています。そして空気もなければ水もない。それなのに、月の世界に住んでいる人間があるんですか」

これは正吉の質問だった。

すると、マルモ隊長は、にっこりとうなずいて、

「もつともだ。そういう疑問を持つのは。だがね、この死の世界と見える月にも、あんがい生物が住んでいられるかもしれない。実は今までわしは、月世界には生物なしという考えでいたので、今日まで問題にしていなかったが、今日ばかりは恐^{おそ}れいったよ、カンノ君」

マルモ隊長はカンノ博士を見で、微^び笑^{しょう}した。

「カンノ博士が、どうしたんですか」

正吉が、たずねる。

「月世界に生物が住んでいられるかもしれないというのは、実にカンノ君のたてた説なんだよ。君、話してやりたまえ」

「はあ。それでは、かんたんに申しませんが、元来月は、地球の一部がとび出して、この月となったのです。おそらく今太平洋があるとところあたりから、抜け出したのであろうといわれています。ことわっておきますが、これは私の説ではなく、昔から天文学者の研究でとな唱えられている学説の一つです」

正吉はカンノ博士の、この奇抜な説に、ひじょうな興味をおこして、前にからだをのりだした。

「これから後が、私の説なんです、しからば月が地球を離れるとき、動物も植物もいっしょに持っていったに違いない。そして条件さえ、よければ、月の上で、しばらくはその動物や植物がはんしよく繁殖し、はんも繁茂したに違いない」

「おもしろいなあ」

「そのうちに、月世界の上にある大異変が起つて、だんだん冷却してきた。そこで動物や植物の多くは死んで行き、枯れていった。しかし動物の中で、文化の進んでいた者——つまり人間でしようね、この人間たちは早くも身をまもることを考え、その仕事にとりかか

った。どうしたか分からないが、その人間たちの子孫は今も月世界の中に住んでいると考えられないこともない。たとえば、地中深くもぐりこんで、地熱を利用して生活し、あるいはまた別に熱を起し、空気を作り、食物を作つて相当高級な生活をしているのではあるまいかとも考えられる」

「でも、その頃の人間は、あまり文化が進んでいなかったのでしょうか」

正吉のねつしんな質問だ。

「いや、そうともいえない。五千年以前における人間の文化のことは、ほとんど知られていないが、それより以前に住んでいた人類がすばらしい文化を持っていたことが、方々から出る遺跡によつて、ぼつぼつ知られはじめています。そういう古い文化民族は、ふしぎにもみんな全滅しているのが多いらしい。どういうわけで絶滅したのか。おそろしい流行病にやられたか、洪水や氷河期のような天災でやられたのか、とにかく何かのおそろしい事件のために絶滅したらしい。しかも、何度もこんなことが、別々の時代にくりかえされたらしい。それを思うと、この月世界の人間も、かなり高い文化を持っていたのではないかと思われる。だから月人は、ばかになりませんよ」

カンノ博士のことばに、正吉は今までにない感動をおぼえた。月人は、きつと実在する

のにちがいない。

ハンカチーフの研究

やつとのことで、装甲車隊は、宇宙艇「新月号」が待っているところへ帰りつくことができた。

「ああ、よく帰って来たね」

「ずいぶん心配していたよ。ここに残っている私たちは、ついに悲壮なる最後の決心をしたほのだ」

「いや、心配させてすまなかつた。みんな、助かったよ。ありがとう。ありがとう」
迎える者も迎えられる者も、ともに涙をうかべて、抱きあつた。

装甲車は、すぐさま宇宙艇の中に格納せられた。

マルモ隊長は、嚴重な見張をするように命令した。それは、例の月人たちが、いつ逆

襲^{しゆう}してくるか分からなかったからである。

トロイ谷で掘って来たルナビウムは、大切に倉庫へしまいこまれた。

「どうだい。今日採^とってきたルナビウムだけで、これから火星を廻って、地球へもどるのに十分だろうか」

隊長は、機械長のカコ技師にきいた。

「とてもだめですね。どうしても、今日採^とってきた量の三倍は入^{にゆうよう}用^{よう}ですね」

「あと、どれだけいるのか。それでは、明日もう一度トロイ谷へ行って掘ることにしよう」
「しかし隊長。トロイ谷へ行くことは、たいへん危険だと思えますが……」

「危険は分っている。しかし火星へ行くのをやめて、このまま地球へ引返すこともできないと、みんなはいうだろう」

「それはそうですね」

「そうだとすれば、われわれはもう一度危険をおかさなくてはならない」

「やつぱり、そういうことになりませんかあ。あの倉庫第九号に貯えておいたルナビウムが盗まれないであれば、こんな苦勞をしないですんだのですがね。あれを盗んだ犯人は、もう分かったのですか」

「カンノ君が調べていたんだが、その調べの途中で、僕たちがトロイ谷から救いをもとめたので、カンノ君は捜査そうさをうち切つて、われわれの方へかけつけたのだ。そういうわけだから、カンノ君はまだ犯人をつきとめていないだろう」

隊長とカコ技師がそういつて話をしているとところへ、正吉がひよつくり顔を出した。

「あ、隊長。お願いです。ぼくをもう一度、倉庫第九号へ行かせて下さい」

「あぶないよ、それは。しかし、どうしてもう一度行きたくなったのか」

「ぼくは、おじさん毛利博士の最後を見とどけたいのです。あの倉庫をもつとよく探せば、おじのことが分かると思うのです。それにカンノ博士も、ぼくもいつしよに行つてもいいといつておられます」

「なに、カンノ君までが、そういうのか。みんな自分の生命をそまつにするから困る。もし一人がたおれると、その人だけの損ではなく、わが探検隊全体が弱くなるんだから、そこを考しちようえて自じちよう重じゆうしてもらわないと困る」

「はい」

そういわれると、正吉はそれでも行かせてくださいとは、いいかねた。そして、しおれて、カンノ博士のところへ戻つていった。

カンノ博士は、正吉の方へちらりと目をやっただけで、また机に向かった。

机の上には、顕微鏡がある。それから化学実験用の道具が並んでいるが、これは四角い鞆の中にはいつていて、いつでもこれをしまつて、鞆の形にして携帯できるようになっている。

博士が顕微鏡を使つてのぞいているのは一枚のハンカチーフであつた。これは倉庫第九号の入口のところで拾つたもので、五万年前の人骨が横たわる下にあつたものだ。

「うん、よしよし。なるほどなあ」

博士はひとりごとをいった。

正吉は、何事だろうと、博士のそばへそつと寄つていった。すると博士は、気がついて正吉を手招きした。

「おい君、私は今一つ、発見したよ。このハンカチーフの主——つまり君のおじさんの毛利博士は、少なくとも今から三ヶ月前までは生きていたという事実が分かつた。それはこのハンカチーフについている博士の身体からの分泌物ぶんびつぷつの蒸発変化度じょうはつへんかどから推定して今のように入ることができるとだ。どうだね、この発見は君に何か元気を加えることにはならないだろうか」

「ああ、そうですね。しかし三ヶ月前まで生きていたことが分かって、大したことではありませんね。今、生きているかどうか、それを知りたいです」

正吉は、あまりうれしがらなかった。

「フーン。君はこの発見を、その程度の値打にしか考えないのか。私なら、もつとよろこぶがなあ。つまり三ヶ月前に生きているものなら、今も生きているだろうとね。三ヶ月なんか、この月世界ではなんでもない短い期間だよ」

「そうですね。ぼくは、おじが現在生きている姿を見せてくれるまでは、うれしがないでしょう」

「おやおう。だいぶんごきげんよろしくないようだ。そんなに悲観してしまつては困るね」
せつかくカンノ博士がわざとそういったのだと思い、よろこぶ気になれなかったのである。

せま
迫る怪影
かいえい

警鈴けいれいが、この宇宙艇「新月号」の隅すみから隅までに響きわたったのは、その直後のことであつた。

「あッ、警鈴けいれいだ」

「なんだろう、今頃警鈴が鳴るなんて……」

正吉もカンノ博士も、共に耳をそばだてて、警鈴の次に高声器からとび出してくるはずのアナウンスを待ちうけた。

「月人げっじん一名が本艇右舷の第三門口を破壊しようとかかっている——艇長命令。全員直ちに配置につけッ」

さあ、たいへん。月人の来襲らいしゅうである。

来襲した月人は、今のところたった一人だというが、ゆだんはならない。第一番に偵察者がやって来て、そのあとに雲霞うんかのようにおびただしい月人隊がおし寄せられるかもしれない。

カンノ博士は、すぐ操縦室にとんでいった。正吉も、博士のあとについて、その室へは

いったが、彼はテレビジョンの下へ行って、月人を見ようとした。

見える、見える、

たしかに月人だ。トロイ谷で見かけたとおりの月人の姿をしたものが、第三門口を、こぶし拳でがんがん叩いている。カブト虫みたいな気味のわるい身体。上がとんがったのつべらぼうの頭。その上に黄いろく光って見えるキツネのようにつりあがった二つの目。たしかに月人だ。

「早く撃つたがいい。艇をこわして、中へは行ってこられたらたいへんだ」

「そうだ。やっつけた方がいい。トロイ谷で、きやつらは勝ったように思っているのだ。こつびどくやつつけてやるがいい。」

隊員たちは、トロイ谷で月人からひどい目にあわされたので、今こそ月人をたおして、地球人の威力いりよくを見せるときだと、いきまいている。

マルモ隊長の耳にも、隊員たちの声がはいった。しかし、彼はおちついたおだやかな人物であつたから、一人の月人をここで倒すよりも、もつと外にいい方法はないものかと、もう一度考えた。

そのときだつた。正吉が隊長の腕に飛びついたのは。

「隊長さん。あの月人は、ぼくのおじの毛利博士だと思います。だから、手荒なことはしないようにして下さい。」

正吉のことは、隊長をおどろかすのに十分であった。

「なに、あれが毛利博士だって。それが、どうして君に分る。」

「そういう気がしてならないんです。それにああして戸を叩く格好が、おじに違いないと思うんです。中へ入れた上で、よく調べることにしてください。」

「だが、もしほんとうの月人だったら、困ったことになるよ。そのとき君の立場がなくなるが、いいかね」

「ええ、いいですとも。ぼくは自分の責任をとります」

正吉は思い切ったことをいった。

それというのも、さつきカンノ博士の説明を聞いてからこっち、なんだかおじの毛利博士がまだ生きているような気がしてきたのだ。実はあのとき正吉は、カンノ博士の説をあまり信じないようなことは、いったものの。

「隊長。あの月人の姿をした者は、正吉がいうとおり、たしかにわれわれと同じ地球人ですよ。ああいう戸を叩く仕草は、地球人独特の仕草です。月人なら、あんなことはやらな

いでしよう。ですから、戸口を壊して侵入するつもりなら、体当たりするとか、すごい道具を持つてくるとか、もっと大げさなことをやると思いますよ」

そういったのは、カンノ博士だった。博士はいつの間にか正吉のうしろに立っていたのだ。

「なるほど。よろしい。君たちの意見に従って、あの疑問の人物を、中にいれてみよう」
隊長は、そこで命令を発した。

命令が出たので、隊員は反対するのを即座にやめた。そして嚴重警戒のもとに、戸口を開いて、かの疑問の月人を艇内に入れた。

かの人物は、両手をあげて、よろめきながらはいつて来た。そして急いで自分のかぶつていた兜をぬいだ

ああ、その下から現われたのは、正しく地球人の顔だった。苦労にやつれた白髪の老人の顔だった。

「あ、おじさん。ぼくです。正吉です」
老人の方へかけだしていった少年こそ、もちろん正吉であった。

事態は重大

おそるべき敵と思ったのが、そうでなくて、なつかしい地球人だった。しかも探検家として尊とつとい経歴を持つ毛利博士だったのである。

艇内は、恐怖よりとつぜん歡喜かんきに変わって、どつと歡聲があがった。

「おお、ようこそ、毛利博士」

「ほう、やつぱりあんたじやつたか、マルモ君」

毛利博士——これからはモウリ博士と書くことにしよう——そのモウリ博士とマルモ隊長とは手をとりあつてふしぎな再会をよろこびあつた。

「正吉までに会おうとは思わなかつた。正吉をよく世話して下さい、お礼のことばもないですわい」

モウリ博士は、正吉の顔を穴のあくほど見つめる。そうでもあろう。正吉を冷蔵球れいぞうきゅうの中に入れて日本アルプスの山中においたまま、約束の二十年後にその球を開いてやるこ

とも出来ず、今までそのままにしておいたのであるから、ここで正吉に会って博士がびつくりするのも無理ではない。

「正吉君との間には、積つもる話があるでしょう。まあ、ゆっくりお話なさい」と、隊長はいった。

「いや、話は山ほどあるが、そんなことをしてられないのじゃ」

「と、おっしゃると何か——」

「重大事があるから、わしは危険をもかえりみず、老ろう衰すいした身体にむちうって駆かけつてきたのですわい。そのことだ、そのことだ。マルモ君早くこの土地をはなれないと、月人の大集団が、この宇宙艇を襲撃して、全員みな殺しになるよ」

「それはどうして——」

「分っているじゃないか。月人たちはトロイ谷のことをたいへん恨うらみに思っている」

「いつ来襲するのでしょうか、月人たちは」

「今、さかんに武器や空気服をそろえにかかっている。あと二、三時間たてば、かならずここに押しかけてくるだろう」

「えっ、たった二、三時間しか、猶ゆうよ予がありませんか」

「二、三時間あれば、この月世界から離陸することはできるじやろう」

「それはできませんが、本艇はルナビウムをもっとたくさん手にいれなくては予定の宇宙旅行ができないのです。実は倉庫第九号に、そのルナビウムがかなり豊富に貯蔵してあったのですが、こんど来てみると、それがそっくり盗まれているのです。全く困りました」

「ああ、あの倉庫のルナビウムのことか」

「おや。モウリ博士は、あの倉庫のことをご存じですか」

「知っていますよ。あれも月人がやったことです。あとでくわしく話すが、あの倉庫のことを、たいへん気にしているのです。もちろんルナビウムの用途ようとについても、彼らは勤かんづいていますのじや。そこで地球人を困らせようとして、あの倉庫にあつたルナビウムは全部ほかへはこんでしまった。」

「うーん、それは気がつかなかつた。こつちのゆだんでした。で、どこへはこんでしまったのでしょうか、そのルナビウムを——」

「その場所を教えてさしあげる。近いところじや。だから、あと二時間以内に、それを掘りだして、この艇内へはこびこみ、すぐ離陸したらいいじやろうと思う」

「そのかくし場所はどこですか」

「それがね、おかしな話だが、この宇宙艇は正にそのルナビウムを埋めてある地点の頂上に腰をすえているんじゃない。これでは月人が気をもんで早く襲撃して全滅してしまいたがっているわけも察しがつくでしょうが」

「ははん、それはおどろきましたな」

モウリ博士が生命いのちをまもりにして持ちこんでくれた土産みやげばなしはマルモ探検隊にとって非常に貴重きちょうなことがらだった。

それにより、さっそく全員を動員して、すぐ真下を掘りはじめた。

あつた。出て来た。おびただしい貴重燃料のルナビウム！

莫ばくだい大な量にのぼるものだったが、それをわずか一時間あまりで、全部艇内に取りこむことができた。これだけあれば火星を訪問して、地球へ戻るには十分すぎる。マルモ隊長はじめ全隊員は、どのくらい心丈夫になったかしのれない。

「おや、来たらしいぞ。あの地ひびきは、月人の大軍が近づく音にちがいない」

モウリ博士は月世界に住みなれたせいで敏感びんかんだった。

すわこそ、月人の大襲来だ。

マルモ隊長は、急ぎ出発用意の命令を下した。全隊員は、ルナビウム運搬うんぱんで疲れ切つ

た身体を自ら叩きはげまして配置につき、死力をつくして急ぎ出発準備をととのえにかか
る。これには、まだいささか時間が必要であった。

「用意よろし」の報告を待つマルモ隊長は、ついにそれを待かねて、探照灯の点火を命じ
た。

青白い数條の光が、さつと巨艇からとび出した。その光が、でこぼこの月面を照しつけ、
左右に掃いた。おどろいたことに、どの光も、ものものしい月人部隊の進撃姿をいっばい
に捕えていた。

その数は何十万とも知れぬ月の大軍だ。

「出発用意よろし」の報告は、まだマルモ隊長のところへはとどかない。そばに立ってい
る正吉は、気が気でなかった。

はたして月人の襲撃前に、わが「新月号」は月世界を離れることができるかどうか？

アブラ虫競走

マルモ探検隊員をのせて、ロケット新月号は今や大宇宙を矢よりも早く進む。

暗黒の月世界をだんだんはなれ、その向こう側の昼の面が、大きな三日月の弧ことなって動きあがって来る。

これからロケットは、いよいよ火星のあとをおいかけることになったのだ。

ここ当分は、たいくつな航空がつづく。いかに希きゆうねんりよう有燃料ルナビウムをたくさん使っても、火星においつくまでには、約三ヶ月の日数がかかる計算になっていた。

乗組員たちは、今からたいくつになつてはたいへんだと、たいくつをまぎらすための、いろいろな工夫をこらす。

将棋のトーナメント競技を計画して、入会をすすめる者がある。

卓上ベースボールのリーグ戦をするメンバーを募集してまわる者がある。

おとなしいところでは、地球から放送されるテレビジョンによって、これから三ヶ月間に、編物講習を勉強しようと決心する者もあった。

正吉少年が通路を歩いていると、料理番のキンちゃんに、ぼったり出会った。キンちゃんとは、しばらく顔をあわせなかった。二人は別に働いていたからだ。そのキンちゃんは

にここにこしている。

「キンちゃん、どうしたの。たいへんうれしそうだね」

と、正吉が声をかけると、キンちゃんはいよいよ顔をくずしてげらげら笑い。

「うふツ。ちび旦那だんな。わしんところが、えらい人気なんですぜ」

ちび旦那などと、キンちゃんは失敬なことをいう。が、なかなかごきげんよろしい。どうしたわけだろう。

「なにが大人気だというの」

「いや、実は、わしのところで、ちよつとした競走をはじめたんですがね。それが大繁だいはん

昌じょうなんで。みなさんがどつとおしかけてきてね、部屋の中がぎゆうぎゆうで、たいへんなんですよ」

「どういうわけで？」

「どういうわけでといつて、つまり、わしの考えだした競争に人気がつつかり集まってしまったんですよ」

「誰が競争するの」

「誰って、つまりアブラ虫ですよ」

「アブラ虫だつて？ アブラ虫かい」

正吉は、おどろき、そしてあきれた。

キンちゃんの方は、どうですといたげに、にやにや笑つて、

「食堂に出てくるアブラ虫を、大切にして飼つておいたのです。かなり大きいのがいますよ。横綱というのは、一番大きくて、腹が出っぱつているのです。そのかわり、競走させると案外おそいのでねえ」

「なんだつて、アブラ虫なんか飼つておいたの」

「たいくつだからですよ。アブラ虫だつて、生きてうごいていれば友だちのかわりになりますからねえ。それにバターをなめさせたり、ジャガイモをくわせたりしていると、アブラ虫もだんだんわしになつてくるんでね。そりやとてもかわいいですよ」

キンちゃんは目を細くして笑う。

そのキンちゃんが、ぜひコック部屋へ見にきてくれというので、正吉はそのあとについて、のぞきにいった。

すると、部屋の外まで、人間のお尻がたくさんはみ出している。みんなアブラ虫競走に賭^かけて夢中になつている連中だつた。

キンちゃんのかわりに、散髪夫さんぱつふの虎さんとらというのが、ちゃんとアブラ虫を指揮して競走をやらせていた。経営者側のキンちゃんも虎さんも、だいぶんもうかっているらしい。しかし、かんじんのアブラ虫は、そうたびたびは競走をくりかえさない。つまり競走をするのも、バターやジャガイモをなめに行くためであるから、一回なめると腹がふくれる。二度目、三度目といううちに、すっかりたべあきてしまつて、ゴールのところまでバターがおつても、あぶら虫はかけださないのだ。

「ねえ、ちび旦那。あんた一つ、あぶら虫を飼つて、数をふやす係をやってくれませんか。そうしたら、うんと手当を払いますぜ」

キンちゃんは、大まじめでそんなことを正吉に申し入れた。

正吉は、アブラ虫にいくつかれたことがあつて、アブラ虫はきらいだからと、キンちゃんにことわりをいった。

月人げっじんの秘密

それから正吉は、艇長室へいった。

そこではマルモ隊長をはじめ、カンノ博士やスマレ女史、それからカコ技師もあつまっていた。

もう一人、モウリ博士の白髪頭しらがあたまが交まじっていた。博士は、さつきまで寝ていたはず。ここへ出てきたのは、疲れが直ったからであろう。思いのほか元気な老博士だった。

みんなは、モウリ博士の話に熱心に聞き入っている。

「おお、正吉か。ここへおかけ」

博士は、にこにこ正吉の方へ笑顔を見せて、すぐそばの椅子を動かした。

「今、みなさんに、月人の話をしていたところじゃ。お前も話が分かるなら、聞いていなさい。きつと参考になるからねえ」

そういつて老博士は、またみんなの方を向いて、手をふり顔をふりして、月人のふしぎな生活について語りだした。

「月人は、月の表面に、たくさんの出入口を作っている。そこから中へはいりこむと、もちろんそれはトンネルのようになっていゝるんだが、斜ななめに掘ほってある。左右は階段になつ

ているが、まん中はよく滑るすべるように、磨いた岩石の舗道ほどうになっている。つまり、これが子供の遊び場にある『おすべり』と同じ作用をするのだ。滑すべって、早く下へ行けるように考えてあるのじゃ。月人は、なかなか工夫をするのが上手だ」

そこで老博士は、正吉の方へふりかえった。正吉が熱心に聞いているのをたしかめると、につこり笑って、また顔を正面に向け直した。

「滑すべり下りると、そこには一つの関所せきじよがある。重い回転扉のはまった球形きゆうけいの大きい洞穴どうけつみたいな部屋だ。つまりこの部屋は、空気の関所だ。それより奥は、空気が濃こいのだ、手前の方は空気が薄い。その境界きょうがいになるのが、この回転扉だ。そこでこの回転扉をまわして中へはいると、その奥には、またもや下へ下りるトンネルがある。構造は、さっきのトンネルと同じことで、まん中のところは『おすべり』ができるようになっており、両側には階段がついている。なかなか大仕掛おおしかけだ」

「すると月人は、土木工事に優秀な腕前を持っていると見えますね」

「そうだよ。わしもたしかにそれを認める。月人は、あの寒冷かんれいで空気のない地面を持っている月世界に、自分たちの生命をつなぐためには、土木工事に上達しないわけにはいかなくなつたんだ。つまり、月人は、土地を掘って、地中へ、地中へ、と下りていったんだ

よ。表面は寒冷でも中ははずつと暖かいからね。それに、空気は月の表面からとび散ってしまつたが、地中にはいくらかそれが残っていたのだ。だから月人は、地中深く姿を消し、そしてその子孫が今もお生命をつないでいるんだ。全くけなげな連中だ」

モウリ博士は、力をこめて、そういつた。月人を恐怖する博士も、これまでに月人がたどつた運命と、忍耐にんたいづよい努力とには、同情し、敬意をもっているのだった。

「でも、おじさん。そればかりの空気ではたくさんの月人が暮らしていけないでしょう」
正吉は、そういつた。

「いや実際、地中にもぐつてみると、案外に空気のためっているところがたくさんあつたのだ。もちろん、そのとき地中にもぐつた月人の総数はそんなにたくさんではなかつたらしい。数千の集落のうちのいくつかが、地中にもぐりこむことに成功したのだそうだ」

「すると、月世界の空気はある時機になつて、急に月の表面から消えてしまつたのですか」
「そうなんだ。どうしてそんなことが起つたかというと、そのとき、月のごく近くを、かなり大きい彗星すいせいがすれちがつた。そのとき月の表面へ、はげしく彗星の一部分が衝突した。そのとき、たくさんの月人が死んだ。彗星が去つた。そのときに、月世界の表面から空気がなくなつたという話だ。これは月人が子孫にいつたええている、いわゆる伝説なん

だ。だが、これはたしかにほんとうのことらしく思われる」

モウリ博士の話は、いよいよ奇怪味を増してくる。

「月人は、今いろいろな方法でもって、地中で空気を製造している。われわれ地球人が、水道の栓をひねって、水を出してのむように、月人たちは、自分の家——それはもちろん地下の穴倉式あなぐらしきのものなんだが、そこに住んでいて、部屋にひいてある管から、必要のときに空気を出して吸って生きている。そしてさつき話したように、空気が割れ目などを通じて地面の外へにげることをおそれ、地表と地中との交通路は、空気をなるべく洩もらさないように、厳重な仕掛かりでふせいである」

「なるほど。それでさつきのトンネルや回転扉の話とつづくんですね」

一座は感動して、みんな溜息ためいきをついた。有名な探検隊長として知られているマルモ・ケンさえ、モウリ老博士がしたほどの深い月人の秘密については、今まで知らなかったのだ。

「そうだ。さつき話したトンネルと回転扉の数珠しゆずつなぎだ。第一の回転扉の次に、またトンネルがあり、その先に、また第二の回転扉があるという風に、少なくとも第五の回転扉を経へなければ、月人の居住区へは達しないのだ。わたしは、その居住区に永い間暮らしてい

「たんだ」

「おお、モウリ博士」

「月人は空気をあまりに大切にすまあまり、月世界の表面へ出ることも、たいへんいやがる。だから、知能は、われら地球人間よりもすぐれているところがあるし、地球にない貴重な資源を豊富に持っているのに、彼らは一台の飛行機さえ持っていないんだ。だからこのロケットが、月世界を離れて飛びだしさえすれば、あとは月人に追いかけて危険な目にあうというようなことはないわけだ」

「ああ、そうですか。それを聞いて、たいへん安心しました」
マルモ隊長も、はじめてにつこり笑った。

見え出した火星

火星へ、火星へ――

ずんずんとロケット新月号は、大宇宙を進んで行く。

月世界を離れたとき、火星への距離はだいたい七千万キロだった。

三ヶ月ほどの進しんくう空ののち、火星に達する計算であるが、そのときは火星が地球や月に對して一番近くなっているときで、火星と地球との距離は五千六百万キロほどになっているはずだった。

だから月世界を離れたロケット新月号は、当時の火星の距離七千万キロを飛ばなくてもすむのだった。つまり三ヶ月のうちに、火星の方が自分でこつちへ近づいてくれるから、それだけ新月号の方では行こうてい程を短たんしゆく縮することができるわけだった。

貴重なる資源ルナビウムを積みこむことが出来たので、新月号のスピードは予定のおりにあがり、火星へ達へする日も、予定日を狂わないだろうと思われた。

万事が好調にいつている。

一ヶ月経ち、二ヶ月経ち、次の第三ヶ月目にはいった。

新月号と地球との間には、たえず通信が交換されており、テレビジョンも受けたり、こちから送ったりしていた。だが、この退たいくつ屈で平へいおん穩な暗あんこく黒の空の旅は、地球の方ではあまり歓迎しなかった。

それにひきかえ、乗組員たちは、地球からの通信やラジオ放送やテレビジョンを、出来るだけ多く受信して、聞いたり見たりしたかった。むりもないことであった。もうほんとうに、いつも同じ新月号の中に起き伏しし、窓から外をのぞけば、いつも同じようにまっくらな空にダイヤモンドをちりばめたように星が光っているのであった。全くこの単調な生活には、どんな辛抱づよい人間でも、がまんがなくなるのだ。

そのころ、この唯一ゆいいつの、そして最も大きな慰めなぐさである通信がどうも今までのように、工合くわいよくはこぼななくなつた。

通信局の連中は、ようやく仕事の種が発生したので、退屈からのがれると、大よろこびであつた。

だが、通信の不調の原因は、よく分からなかつた。これが地球の上なら、磁気嵐じきあらしのせいであるとか、デリンジャー現象だとかいえる種類の不調だったが、こんな宇宙の一角で、そうした原因でこんな不調が起るはずはなかつた。

「これは重大だ。ひよつとすると、一大椿事ちんじはつせい発生さきぶれの先触さきぶれかもしれない。みなさん、ゆだんなく気をつけて下さい」

通信局長のスミレ女史は、とうとう全局員に対し、警戒を命じた。

計算によると、あと二週間で、火星に達するあたりまで、新月号は近づいた。

火星の姿が、地球から見ると満月の倍くらいの大きさに見えるようになった。

しかし、火星の輪郭も、ぼんやりとしている。全体が赤橙色にぬられていて、なんだかうす汚い。黒緑色の線が、網をかぶったように走りまわっているのも見える。極のところには白冠が、ひときわ明るく光っている。

まちがいなく火星は、指呼の間に見えているのだった。

艇長室では、幹部の間に、火星のうわさがとび交っている。

「モウリ博士。あなたは火星へ行かれたことがありますか」

「いや、こんどがはじめてですよ。しかしかねがね行ってみたいくて、研究はしていませんよ。火星は、実に興味の深い星ですね」

「そうですとも。昔からさわがれ、そして今も一番人気のある星ですね」

「マルモさん。あなたは、火星へ何回ぐらい行ったんですかい」

「行つたというと、上陸したという意味ですか。それなら、二回だけです。そして、どつちの場合も大失敗でした。上陸する間もなく、生命から離陸しなくてはなりませんでした。火星は全く苦手です」

「あんたでも、そうなのかね。これは意外だ」

「だから今度は、どうしてもうまく上陸して、火星人も十分に話し合いたいと思います」

「火星人と話し合う。ふーん、そうかね」

モウリ博士は、大きく目をむいた。

宇宙塵うちゅうじん

「通信がさつぱりだめになったんですって」

正吉は、そのうわさを聞くと、心配になって無電室へ行き局長のスマイレじよし女史じよしにあつて様子こころをたずねた。

「ええ、その原因が分かりましたから、もう安心しています」

スマイレ局長は朗ほがらかにいった。

「すると、通信能力はもう前のように回復したんですか」

「さっぱりだめなのよ」

通信がうまくできないのに、朗らかに笑っているスミレ局長の気持ちだが、正吉にはよくのみこめなかった。

「それじゃ困るですね」

「でも仕方がないのよ。あたしたちの力ではどうにもならないことなんです。火星のまわりには、宇宙塵うちゅうじんがたくさんあつまっている層があるんです。本艇はいまその中を抜けているから、電波が宇宙塵にじやまをされて、通信がうまくいかないのです」

局長の説明で、正吉は「なるほど、そんなことか」と、はじめて分かった。

「宇宙塵で、正吉さんは知っていますでしょう」

「宇宙にたまっている塵ちりのことでしょう」

「そんなことをおっしゃるようでは、本当にご存じないようね。いったい、どんな塵だと思っというらっしゃるの」

「さあ」

正吉はそこまでたずねられると返答に困った。

「宇宙の塵というんだから、つまり宇宙旅行中に遭難してこわれたロケット艇なんかの破

片や、その中からとび出した人間の死骸しがいや机や、イスや、そんなものが塵ちりみたいになつて
いるのを指しているのでしょうか」

「いいえ、ちがいますわ。宇宙塵というのは宇宙をとんでいる星のかけらのことです。つまり隕いんせき石も宇宙をとんでいるときは宇宙塵といえるわけです」

「ああ、そうか。なるほど宇宙の塵ですね」

「火星のまわりをとりまいている宇宙塵は、隕石の集まりではなく、大昔に火星のまわりをまわっていた火星の衛星の一つがこわれたものだともいわれ、また、そうではなくて、いまのところその宇宙塵はどうしてできたかその原因は分からないのだともいわれます。とにかく火星のまわりを無数の星のかけらが包んでいるものにちがいありません。そういうものがあると、電波は宇宙塵に吸いとられてしまつて、達しにくくなるのです」

「ああ、やつと通信の調子のわるいわけが、ぼくに分りました」

「そして、宇宙塵のあるかぎり通信がうまくいかないわけですね」

「そうです。だから、火星は、地球人とちがつて、電波を利用することがあまり上手でないかもしれませぬね」

正吉とスミレ女史がこうして話をしていたとき、ガンとだしぬけに大きな音がした。

それと同時に、ロケット艇はばらばらになるのではないかと思うほど、ひどく震動し、そして正吉もスミレ女史も床の上にたたきつけられた。室内の器具で、ひっくりかえったものは数をしらず、機械の間から花火は出、警報ベルは鳴りだすというえらいさわぎであった。そして停電になった。

「あ、痛い」

「な、なんでしよう」

電気が来た。それと同時に高声器が大きく鳴りだした。

「火災が起った。中部倉庫だ。必要配置員を残して、全員は中部消火区へ集まれ」

さあ、たいへんだ。

宇宙をとんでいる間に火災を起したくらい不安な出来ごとはない。なぜそんな火災を出したのか。

正吉は、どこの部屋の必要配置員でもなかったから、すぐに中部消火区へかけつけなくてはならなかった。でも、あまり不安が大きかったので、かけだす前にスミレ女史にたずねた。

「どうして火事なんか、ひき起したのでしょうか」

「それはきつと、大きな宇宙塵が本艇の中部倉庫の付近へ衝突しやうとつして、中部倉庫にしまつてあつた燃料が発火したのでしょうか」

女史は、そう答えた。

「へえーツ。そんな大きな宇宙塵があるのですか」

「大きさが富士山くらいある宇宙塵は決して少なくないと、今まで知られています」

「富士山くらいですか。そんな大きなものも、塵ちりとよぶのですか」

「宇宙の塵だから、大きいのですよ」

「そんな大きな塵にぶつつかられたら、本艇ほんていなんかひとたまりもなくこわれてしまうじやありませんか」

「そうですね。幸いにも、さつき本艇に衝突したのは、小さい岩くらいのものだったのでしよう。あ、信号灯がついた。わたしをよび出しています。めんどろな仕事が始まるのでしよう。あなたも早く、消火区へ行つてお働きなさい」

スマイレ女史は正吉にそういつて、受話器を頭にかけた。

火星に着陸

正吉は、中部消火区へ急いだ。

もうみんな集まっていた。

なるほど燃料倉庫の一つから、ものすごく火をふきだしている。

きいてみると、やっぱりスミレ女史のいったとおり、宇宙塵のでかいやつが衝突して発火したのだという。

「火事は消せますか。本艇は爆発しませんか」

正吉は心配のあまり、消火区長として指揮をとっているトモダ学士にたずねた。

「火事はなんとか片づくと思うがね。しかし困ったのは宇宙塵が本艇にぶつかって横よこっば腹らへあけた大穴の始末だ。そこからどんどん艇内の空気がもれてしまうんだ。そうなる
と本艇が貯えている酸素をどんどん放出しなくてはならない。困ったよ」

トモダ学士は、頭を左右にふる。

「このへんに気密扉きみつとびらがあるでしょう。その扉をおろして、空気が外へもれないようにし

たらしいでしょう」

正吉は、意見をのべた。気密扉というのは艇内が小さな区画くかくに分かれています、その境さかいのところ、下りるようになっていて扉だ。それを下ろすと空気は通わない。だから気密扉を下ろして空気が外へもれることは防げるわけだと、正吉は考えたのだ。

「それは正しい考えだ。しかしねえ正吉君、不幸なことに、さっきの宇宙扉の衝突で、こち例の気密扉を下ろすモーターの配線が切断せつだんしてしまつてね、かんじんの気密扉が下りなくなつたのだよ」

どこまで運がわるいのだろうと、正吉は失望した。しかしよく考えてみる。それは運がわるいではなくて、そういう場合も考えにいられてこのロケット宇宙艇の設計をしておかねばならなかつたのではなからうか。つまり設計の不完全だ。失敗だ。いく隻せきもロケット宇宙艇をこしらえても、完全なそれをこしらえ上げるには、技師たちはまだ勉強をしなくてはならないのだろう。ことに、机のうえで頭をひねるだけではなく宇宙旅行の経験をつんだマルモ・ケン氏のような人から、実地の話をよく聞いて、それを土台にして設計をしないと完全なもの出来ない。

乗組員の煙の中をくぐつての一生けんめいな努力によつて、モーターの配線が、あたら

しく張られた。それで気密扉が下りるようになった。

それが下りると、火災の方もやや下火となった。しかしまだときどき小爆発をするので安心はならなかった。

幸いにも、火星への距離はいよいよ近くなり、着陸まではまず持ちこたえられることが分かって乗組員たちの顔も大分明るくなった。

ロケット宇宙艇新月号が、火星に着陸したのは、月世界をとびだしてから、ちょうど三ヶ月と二日目だった。火災のために到着がすこしくるって遅くなったが、だいたい予定どおりであった。

着陸のときは、まだ火災は消え切っていないし、宇宙塵にやられてこわれた部分はそのままであったから、はたして無事に着陸できるかと案じられた。

だが万事うまくいった。艇の下側から、着陸用のソリがひきだされる。そして火星の表面に着陸地帯として、もってこいの平らな砂漠さぼくを探しあてると、一気にそれへまい下ったのであった。

新月号が火星のふしぎな巨木きよぼくの林を横にながめながら、まっ白い砂漠の上に砂煙をうしろへまきあげつつ着陸したところは、実に壯観であった。

月世界へ着陸したときの感じと、こんど火星へ着陸したときの感じとは、たいへんちがう。

月世界は空気のない冷たい死の世界、氷の国であった。火星はそうではない。すくなくながら空気もある。温かくもある。死の世界ではなく、形こそ怪異であるが、植物も繁茂している。

また、どこかに火星人がすんでいるとも考えられる。火星の方が月世界よりも、ずっと住みよい。

そういうことが、探検隊員たちをほっとさせたが。

マルモ隊長は、着陸と同時に乗組員総がかりで、火災を完全に消すことを命じた。なるほど、まだ重大な仕事が残っていたのだ。乗組員の多数は、艇外へとび出して宇宙塵に損傷した穴の方から消火につとめた。このとき彼らは、やはり空気かぶとをかぶらなくてはならなかった。そのわけは、火星の表面には、月世界とはちがって空気はあるけれどもその空気はたいへん、き薄であるから、人間はやはり酸素を自分で補給しないと息ぐるしくて平気ではいられないのであった。だが、例のいかめしい空気服は着なくてもよかった。空気かぶとは、頭にすっぽりとはいる円筒形のもので、肩のところ、ぴったりと

身体についていた。そして空気かぶとの大部分は、透明な有機ガラスゆうきでできていたから、すこしはなれて見ると、そういうかぶとをかぶっているのかいないのか、区別がつかないほどだった。この中へ送りこむ酸素タンクは背中にとりつけてあった。

艇外へ出た作業員たちは、みんな火星がはじめてであったから、火星の引力になれていなかった。そのために彼らは、意外な失敗をくりかえした。つまり、火星では重力が地球の重力の三分の一しかない。だから一メートル高くとびあがるつもりでとびあがると、それより三倍高く三メートル上まで身体があがってしまうのだ。これは愉快なことでもあったが、同時によけいなこぶをこしらえる原因ともなった。

火災は完全に消えた。マルモ隊長は、それにつづいて、損傷した穴の修理作業に、すぐ取りかかることを命じた。隊員たちは休みなしに働かなくてはならなかった。そうである。ここで損傷箇所をそのままにしておいたら、どんな突発事故によって、さあ火星から離陸だといったときに、たいへん困る。だから火災が消えたら、こんどは何をおいても、艇に穴のあいた個所を修理しておかねばならないのであった。

林の中の怪かい

正吉とキンちゃんとは火星の砂漠の上に立って、空気かぶとを両方からよせあつて、なにかしきりに話をしている。

二人とも、専門技術者ではないので、本艇の修理には役に立たない。だからいまちよつとひまなわけである。

ちよつと二人の話を、聞いてみよう。

「ねえ、ちよいと。あつしといつしよに、あそこまで行つて下さいな。いいじゃないかね」
キンちゃんが正吉にねだっている。

「いつてやつでもいいが、そんな気味のわるい林のところへいつて、なにをするつもりだい」

正吉が、うしろの巨木の林をさしている、その巨木は、地球の木とはちがひ、ぼそぼそしたやわらかい下等な植物のように見えた。それはどことなくスギナやシダるいに似ていた。しかもその幹はたいへん太いものがあつて、人間が四、五人手をつないでも抱ききれ

ないほどのものもあった。キンちゃんは、その木のそばへ行ってみたいというのだ。

「あつしやね、あの木が、料理をすれば、けっこう食べられるように思うんだ。ちよいとそれを調べてみたくてね。もし、うまく火星料理ができたら、第一番にお前さんに食べさせてあげるよ。だから、ちよつと行って下さい」

「ひとりで行くのは、こわいのかい」

「こわいことはないさ。しかし気味がわるいんでね」

「じゃあやつぱりこわいんじゃないか。おかしいなあ、大人のくせに」

正吉はキンちゃんについて、林の方へ歩いていった。ほんとうは、正吉も気味がわるくてしかたがない。

「ねえ。あつしやどういうわけか、身体がふわふわしてしょうがないんだがね」

「それは重力が小さい関係だよ」

「そうですかねえ。なんだか水の中を歩いているような気がするよ。さつき、石につまずいてひっくりかえったが、そのときね、からだはふわツと地面へあたりやがるんだ。ちつとも痛かないんだから、^{みょう}妙でけりんだ」

「地球の上なら、さつそく鼻血を出したところだろうね」

「おつと、さあ来たよ。なるほど、この大木め、いやにぶかぶかしているよ。これなら料理すれば食えるね。すこし切つて持つていこう」

キンちゃんこがたなは、小刀みきをだして巨木の幹みきを切り取つたり、枝や葉を切り落したりして、料理に使うだけのものを集めだした。正吉は、それを見ているのには退屈して、林の中へどんだんはいつていつた。すると、池のふちへ出た。池というよりは、沼地といった方がいいかもしれない。それは正吉にとつて、めずらしい風景だった。

巨木が重なりあつて生えている。池のふちには、きみような形の葉がはえしげつていゝ。水はどんよりと赤い。その水の中に、何か泳いでいる。小さな魚のようでもあり、そうではなく、りようせい棲類はちゆうか爬虫類りゆうのようでもある。それがモの下から出たりはいつたりしている。「おやッ」

正吉は、とつぜん声をあげた。彼はあやしい大きな魚を見つけたのである。大きさは正吉ぐらいある魚が、大きな頭を他の中からぬつともたげたのである。二つのぎよろぎよろ目玉。ほっそりした肩には、うろこが光つていた。肩のそばに左右に生えているヒレをぶるぶるとふるわせると、大きな口をあいて、正吉の方をにらんだ。口の中は、まっ赤であった。

こんどは正吉の方がぶるぶるとふるえて、その場に立ちすくんだ。いったいその奇魚きぎよはなんであつたらうか。

にらむ 怪魚かいぎよ

正吉のおどろきの声に、こんどはキンちゃんがおどろいてうしろの林の中からかけつきた。

「どうしたい、ちびだんな」

「しいッ」

正吉は、キンちゃんにさわぐなど知らせた。

「ええッ。気味のわるいことだ」

と、キンちゃんは、どろ棒ネコのように腰を低くし、草むらを分けてそろそろと正吉の方へ近づいた。

キンちゃんの声が大きかったので、池の水面から顔を出していた奇妙な魚がびっくりして、どぶんと波紋はもんをのこして沈んでしまったのだ。

その話を、正吉は、そばへ来たキンちゃんに話してやった。

「ええッ、大きな魚だって、そいつはめずらしいから、つりあげていって、焼くか煮るかして食ぜんへ出してみたい」

キンちゃんは料理人だから、すぐそんなことを考える。しかし正吉はいった。

「ぼくはその魚料理はたべないよ」

「なぜだね」

「だって、気持のわるいほど大きくて、いやにこつちをぎよろぎよろ見る魚なんだから。

あんな魚の肉をたべると、きつと毒にあたるかもしれない」

「ははあ、毒魚どくぎよだというのだね。よろしい。毒魚か毒魚でないかはこのキンちゃんが一目見りゃ、ちゃんとあててしまうんだ。こんど出て来たら、すぐあつしに知らせるんだよ」

「しいッ。また、水面から顔を出すようだ」

しずかだった水面に、今はあちこちに、小さな波紋が見えている。いや、それは波紋ではなく、あの奇妙な魚が水面に自分の目を出して、岸にいる正吉たちの様子をうかがって

いるのだと分かった。

「しずかにしているんだよ。怪物どもがすっかり姿をあらわして、
 凶々ずうずうしくなるまで、ぼくたちは石の像のようにしずかにしているんだよ」

と、正吉はキンちゃんにくりかえし注意をあたえた。

正吉の予想はあたった。

その奇魚どもは間もなく水面に、大きな顔を出した。それは、正吉たちが見なれている魚のようにとがった顔をしていないで、こぶのような丸味をもっていた。そしてとび出した二つのぐりぐり目玉が、しきりに動いた。

「ふーん。あれでも魚かしらん」

と、キンちゃんは、思わずうなつた。

「それは魚にちがいないさ。水の中にすんでいるんだもの。そして、ほらひれみたいなものがあるし、顔だつて魚に属する顔付きじゃないか」

正吉が、ひそひそとささやいた。

「そうかなあ。しかし、あの魚はたべられそうもないよ。毒魚じゃないにしても、肉の味がとてもまずいにちがいない。がっかりだい」

キンちゃんは、たべられないと判定した。

「そうれ、ごらんな。だが、キンちゃん。もつと辛抱して、あの魚どもがどうするか、見ているんだよ。たべないにしても、一ぴきぐらいはつっていこう。おみやげになるからね」
怪魚は、だんだん姿をあらわしていった。水面からよほど身体をのりだした。なんとなくそれは、その怪物が胸から肩の方まで出したように思われた。しかしその怪魚の身体の下部はどれくらい長いのか、どんな形になっているのか分からないので、胸までのり出したように思うだけであった。

そのうちに怪魚の数がふえた。二、三十ぴきにふえた。しかもその怪魚たちは、じょうは上半身を水面からのりだしたまま、一ヶ所に集まってきた。そして、ひゆうひゆうというよんしんうな奇妙な声をあげ、たがいに首をねじまげ、顔をくつつけあいする。

「あの魚は、声を出すよ。ああ気味が悪い」

キンちゃんは、正吉にしがみつく。

「声を出すだけではないよ。あれは、話をしあっているんだよ」

「えッ。話をしあうって。魚と魚と話ができるのかい。いやあ、たいへんだ、いよいよお化け魚ときまった。とてもたべられるしろものじゃない」

キンちゃんは青くなつた。

「あの様子を見ると、あの怪魚はぼくらの知っている魚よりも、ずっと高等動物にちがいない。ほら、あの怪魚たちは、さつきからぼくらのいるのを知っているんだよ。だから怪魚たちはスクラムをくんで、じわじわとこつちへ近づいて来る」

「なに、こつちへ近づいて来るつて。それはたいへんだ。逃げよう」

「なあに、大丈夫。怪魚たちは、ぼくたちとなにか話をしたいのかもしれない」

「とんでもないことだ、ちびだんな。あつしやあんなお化け魚にくい殺されるのはいやだ。なんでもいいから逃げよう。さあ逃げるよ」

キンちゃんは正吉の手をひっぱつて、無理やりに逃げだした。キンちゃんは大力だいきだつたから正吉はいつしよに退たいきやく却する外なかつた。

池の水面からは、怪魚たちがおたがいの肩へのつていよいよのびあがりながら、逃げていく正吉とキンちゃんの方を熱心に見送つていた。

「たいへんだ、たいへんだ。むこうの池の中に、お化け魚がうじゃうじゃいるんだ」
キンちゃんも宇宙艇のところへかけこむと、大声をたててさわぎだした。

このさわぎに、マルモ隊長以下が、何事だろうと思って出て来た。

正吉は、さつき見て来た池の中の怪魚について、くわしく話をした。

「なるほど。それは重大発見だ」とマルモ隊長がいった。

「火星には、植物は生はえているが、動物はいないという学者もあるが、君たちは、火星に動物のいることを発見したんだ。お手柄だ」

「ところがですね、隊長。その魚はじつにへんてこりんの形をしているんですよ。そして魚にしては、気味きみのわるいほど、じろじろとこつちを見るのです。ですから、あの怪魚は、地球の魚よりも頭脳が発達していると思うんです。

しかしぼくは、あんな魚よりも、火星にいたいのです。隊長さん。火星探検には、いつお出かけになりますか」

正吉は、思っていることを、ぶちまけた。

「火星にわれわれ人間以上の高等な生物が住んでいるというのは、伝説にすぎないのでは
ないかね。ねえ、カンノ君」

マルモ隊長は、かたわらのカンノ博士をふりかえった。

「そうです。私もそう思います。たとえば火星人というものが住んでいるにせよ、われわれ
地球人類よりは下等なものであらうと思えますね」

カンノ博士は神秘しんぴな火星人説を信じないと明めい言げんした。

「おやおや、それでは、せつかく火星人と仲よしになつて握手しようと思つて来たのに、
がっかりしちまつたなあ」

正吉は、ほんとにがっかりした。するとカンノ博士が、正吉を元気づけるようにいった。
「しかし君がさつき見た他の中の怪魚は、たいへん興味がある生物だ。おそらくそれが、
火星に住んでいる一番高等な生物ではないかと思うね。先年ガーナー博士がテレビジョン
装置をつんだ無人ロケットを飛ばし、火星の上空から三週間観測したが、そのときの報告
に、「水中にやや高等なる動物がいるらしい。注意を要する」と書いてある。火星の生物
については、ガーナー博士はこのことだけを記している。だから君たちの発見した怪魚は
よほど値打ねうちのあるものだ。私たちも準備をしておいたものがあるから、それを持って、池

のところへ行ってみよう」

「ぼくも連れて行って下さい」

「もちろん、案内に立ってもらいましょう」

それからしばらくして、カンノ博士はスミレ女史と連れ立って、艇内から携けいたいしき帯式の無電装置のようなものを背負って出てきた。正吉は目を丸くして、それは何をする機械かとたずねた。

「この装置でもって、例の怪魚のことばや、頭脳の働きを記録してくるんだ。これをあとで分析研究して、怪魚がどんな程度の能のうりよく力を持った生物であるか、また、さらに分かれば、その怪魚たちは、どんなことを考えていたか、どんなことをしゃべっていたかなど調べてくるのだ」

「ははあ。それはおもしろいですね」

「ああ、そうだ」

とカンノ博士は、忘れていたことを思い出したらしく、手をうった。

「正吉君。例の怪魚のごきげんをとるために、なにか彼らの喜びそうな食べ物をもつていってやる必要がある。何がいいかね」

「ああ。怪魚にやるごちそうのことですね。それならキンちゃんにまかせるのが一番いいですよ」

キンちゃんが呼ばれた。そしてカンノ博士の話が伝えられた。キンちゃんは、
「おっと、そのことなら合がってん点だ。あつしにすっかりまかせておきなさい」

キンちゃんは、それから料理部屋へかけこむと、バックにいっぱい食べ物をつめて、提さげて出て来た。

そこで一行は、例の池へ出かけた。

正吉とキンちゃんの組と、カンノ博士とスミレ女史との組に分れ、仕事にかかった。正吉とキンちゃんとは、おそろおそろの池のそばへ近よって、怪魚かいぎよのごきげんをとりむすぶのであった。キンちゃんの持つて来た食べ物は、怪魚たちをよろこばせた。ことに、ソーダ、クラツカーは、怪魚たちをよろこばせた。ソーダ、クラツカーをなげるたびに、数百匹きの怪魚たちは水面から宙にはねあがり、落ちてくるクラツカーを途中で自分の口に入れようと争った。そのときに初めて怪魚の全身を見ることができた。それは、じつに怪奇というかグロテスクというか、すさまじい格かっこう好こうと色いろ合あいのものであった。全長は一メートルよりすこし長いくらいで太短い。上半身は大きい、下半身が発達していない。皮

膚の色はうす桃色と緑色とのまだらで、腹部は白かった。上下一対ずつの四つのヒレがよく働き、まだ身体のわりに小さい丸い尾ヒレはプロペラのように動いた。

このふしぎな魚に対し、カンノ博士は「水棲魚人」という名をつけた。

正吉たちが、水棲魚人ともみあつている間に、カンノ博士とスマレ女史は、装置を草むらにすえ、脳波と音波の集録しゅうろくをした。

光る円筒えんとう

カンノ博士とスマレ女史は、集録してきた水棲魚人のことばと脳波の分析研究のため、艇内の実験室に引きこもった。

複雑な装置を働かせ、めんどろな分析をつづけていった結果ついに博士たちは、予定していた以上の収穫を得た。

ちようど、正吉が、その部屋へはいつたときは、輝かしい結果が出た直ぐあとだったの

で、カンノ博士とスミレ女史は、疲れ切った顔に、興奮の色を浮かべながら、正吉にこの研究の成功を話した。

「水棲魚人のことばが、分ったんだ。水棲魚人の脳の働きも分った。やつぱり、水棲魚人は、普通の魚ではなく、高等生物だということが分った。おそらくこの水棲魚人こそ『火星』の正体であろう。つまり、火星では、あの水棲魚人が一番高級な生物だということになる」

「じゃあ、あの怪魚は、地球でいうと、人類の位置を占めているわけですね」

「そうだ。そしてあの水棲魚人は、やがて水中から陸上へはいあがり、陸で暮らすようになるんだと思う。それから、空を飛ぶことも上手になるんじゃないかと思う。なにしろ火星は重力が小さいから、飛ぶということはわりあい楽にできるんだ。とにかく進化論の筆^{つぽう}法^{つぽう}でもって、これから水棲魚人が進化発達した姿を想像すると、われわれ人間に似た身体^{つばや}に翼を生やしたようなものになるのではないかと思う」

「おもしろいですね。それは、今から何年のことでしょうか」

「さあ、どのくらいあとのことか。早くて二十万年かな、いやもつとだ。三十万年もかかるかもしれない」

「すると、ずいぶん先のことですね。しかし火星に地球人類がどしどし来て、文化を移していくことでしょうから、水棲魚人も、早くかしこくなるでしょうね」

「まあ、そうだろうね」

「でも、地球人類は、常に火星魚人よりかしこいものだから、火星や火星人は、結局わが地球や地球人類の保護をうけて行くことになるでしょうね」

「それもそうだと思うね。地球人類は火星を植民地とすることだろう。そしてどんどん地球文化を植えて、火星の文化水準をできるだけ向上させる必要があるね。火星や火星の生物たちは、地球と地球人類のおかげで、たいへんたくをするわけだ」

「火星には、地球人類よりもえらい生物がすんでいるといううわさがあったので、胸をどきどきさせて火星へ着陸したんですが、もうこのようなことが分ってみると、ぼくたちは不安からのがれたけれど、気がゆるんでしまつて、すこしがっかりしましたね」

「ははは、お気の毒さまだつたね。それはそれとして、私たちは、火星魚人と話が出来機械を急いで設計し、それをつくりあげて役に立てたいと思う」

「えッ、火星魚人と話のできる機械ですつて。それはすばらしいなあ。いつになったら、それは出来上りますか」

「早くても一週間はかかるだろうね」

「もっと早く出来るといいんだがなあ、ぼくも手伝わせて下さい」

「よしよし。手伝ってもらいましょう」

正吉にはあと一週間が待どおしくて、仕方がなかった。

ところが、その一週間がたたないうちに、思いがけないことが起った。

というのは、それから四日目の夜のこと、大空に何とも知れず大怪音がひびきわたった。ごうごうというあらしに似てもつとすごいひびきだった。空気はひどく震動し、やがては地ひびきまで起った。

マルモ探検隊員の多くは起き出して、戸外こがいを見た。その怪音の正体は、目に見えた。それは空から落ちてくる「光る円筒」であった。それは天空から無数に落ちて来て、今マルモ探検隊が宿営しゆくえいしているとことから二キロばかりはなれた地点に落下した。おどろいたことには、その「光る円筒」は地面の上に、規則正しい角度でずぶりずぶりと突きささり、そして見る見るうちに、竹でこしらえた垣のような形となった。

「なんだろう、あれは……」

「ふしぎな。宇宙艇でもないし、いったいなんだろう」

そういつているうちに、あとから落ちてくる「光る円筒」は垣みたいなもの一段上に規則正しく並びだした。さらにまたその上に積みあげられたようになっていって、やがて「光る円筒」でもって、巨大な塔が出来た。すばらしい建築だ。あのすばらしい力を、だれが支配しているのであろう。とても、われわれには出来そうもないことだ。カンノ博士もスマレ女史もすっかり青ざめて、無言で「光る円筒」のはなれ業わざをじっと見つめている。

ぼう然ぜんじしつ自失

カンノ博士の顔色が変わった。

スマレ女史も、息をつめて光る怪塔の方へ、大きな両眼をくぎづけにしている。

探検隊長のマルモ・ケンだけは、さすがに探検の場かずをふんでにやにや笑いながら怪塔を見まもっている。

「隊長。私は夢を見ているんじゃないでしょうね」

マルモ・ケンのところへ、よろよろとよろけて走ったのはカコ技師だった。

「夢じゃないよ。カコ君、しっかり目を開いて、よく見ておくんだな」

「隊長。いつたい、あれはなんですか。何事があそこで起りつつあるんですか」

カコ技師は、かん高い声を隊長にぶつつける。

「わしには分らない。わしよりも、君の方が専門じゃないか」

「なんとおっしゃいます」

「宇宙弾——うちゅうだんといったようなものではないかね。とにかく、この火星の外から飛んで来

たものにちがいない」

「宇宙弾といえますと、どんなものですか」

「おいおい、わしに聞くのはだめだよ。それよりも君の専門の眼でもって。あれをよく観察した上で、早くわしに報告してもらいたいな」

宇宙弾の説明を、マルモ隊長は、それ以上しないで、笑いにまぎらせた。カコ技師は、ようやく気がおちついてくるのをおぼえた。

（そうだ。技術者たるものが、こんな場合にあわてるのははずかしい。よろしい。あれはなんだか正体を見やぶってやろう）

彼は、そうがんきょう双眼鏡をとりあげ、光る怪塔へぴったりとつけた。

正吉とキンちゃん、肩をならべて、光る怪塔をぼかんとながめている。

「あれあれ、すごいぞ、また一段高くなった」

「カン詰の塔みたいだよ。あの中に、なにがはいっているのかしらん」

光の塔は、だんだん高くなる。次々にえんちゆう円柱のようなものが落下して来て、すでに見あげられた塔の上につきたち、塔をだんだん高くしていくのであった。

正吉には、塔がだんだん上へのびあがつていくのがふしぎで、おもしろかったし、キンちゃんは、あの円筒の中に何がはいっているのか気になった。

「いよいよ、これはきかいしごく奇怪至極じゃ」

二人のうしろで、老人の声があった。正吉がふりかえってみると伯父のモウリ博士であった。正吉は、いいときに伯父がそばに来てくれたので、よろこんだ。

「おじさん。あのすばらしい塔は、なんですか。何を火星人がこしらえているんですか」
正吉は、知りたいことをモウリ博士にたずねた。

すると博士は、首をちよつとかしげて、

「火星人といえ、例の水棲魚人のことだ。あれが火星で一番かしこい生物だという話だ

から、そうなると、水棲魚人の力で、あんなりっぱな塔が建つとは思われないね」

「じゃあ、あれを建てているのは何者ですか」

「さあ、それが分かれば、みんな分かるんだが、何者の仕業か見当がつかない。しかし人間業んげんわざとは思われないね」

「それでは、だれなんでしょう。火星人もなく、人間でもないとする、いったい何者ですか」

「そばへ行つて、よく調べてみないと、はつきりしたことは分からないが、ひよつとすると他の星から飛んできた生物の群れかもしれないね」

「ええつ、他の星から飛んできた生物ですつて。そんな生物がいるんですか」

「いないと断言だんげんはできない。現にわしは月世界の生物を発見しとる。火星の生物は、水棲魚人という幼稚な生物にしても、他の星には、もつと高等な生物がすんでいて、それが火星へ飛来ひらいしたのかもしれないね」

「地球と火星のほかに、生物のすめる星があるんですか。あれば金星ぐらいのもので、土星だの水星だの、海王星や天王星や冥王星めいおうせいなんか、生物がすんでいない星だということ、本で読んだことがありますねえ」

「わしが、さつき考えたのは、そういうわが太陽系の遊星に住んでいる生物のことではないのだ。もっと遠いところに住んでいる生物じゃないかと思うんだ。知ってのとおり、この大宇宙にはわが太陽と同じようなものが何億もあって、そのまわりには、わが地球や火星と同じような遊星がぐるぐるまわっているのが、ずいぶんたくさんあると推定されている。その中には、生物が住んでいる星がもちろんあるはずだ。そしてその生物が人間のようにかしこいものもあればまた人間以上にかしこいものもある。そういうかしこい生物は、人間が想像することのできないほど大仕掛じかけの仕事をやってのけるだろう、と思うね」

「あつ、そうか。するとおじさんは、あの光る怪塔をこしらえているのは、わが太陽系以外の星に住んでいて、人間よりもずっとかしこい生物だというんですね」

「いや、わしはまだそこまで、はつきり断定だんていしてないよ。とにかく、もっとそばへ行って、よく調べた上でないと、なんともいえないが、そういうことも、頭の片すみにおぼえておくといいね」

「えらいことになったぞ」

と、キンちゃん、目をまるくして、ため息をついた。

つ
の
る
恐
怖

光る怪塔はピラミッド型に十五階まで出来てようやくおさまった。

おそろしさをしばらくおあずけにしておく、まことに見事な建築物に見えた。

マルモ探検隊では、基地に双眼鏡や望遠鏡をすえて、一秒といえども、怪塔から監視の目をはなさなかつた。

カコ技師などは、すぐにも怪塔のところへ近づいて調査をしたがつた。しかしマルモ隊長は、それをゆるさなかつた。

「もうすこし遠くから様子を見てからのことにしないと、危険だ。君たちは、われわれの宇宙旅行に必要な人なんだから、そういう危険が考えられるとき、行くのはやめてもらいたい」

隊長は、そういった。

これには、カンノ博士とスミレ女史の進しんげん言が、一つの力になっていた。

この二人の科学技術者は、光る怪塔に対して、強い警戒心をおこしていた。とにかく、探検隊の一大危機が来たと考えるのが正しいと、マルモ隊長にいったほどだ。

そのために、マルモ隊長は、宇宙艇がいつでもこの火星から離陸し、宇宙へとびだすことができない用意をして、待機たいきしていることを命じた。

「あの怪塔の中から、何者が出てくるか、それが問題の別れ目です」
とカンノ博士はいう。

「いままで観察して来たところによれば、あのような怪塔をそのような方法で組み立てるというのは、人類に近い生物でないと出来ないことです。そして、人類よりもずっと高級な生物にちがいありません。われわれよりも、すこしでも高級であるならわれわれは非常に不利な立場におかれるわけで、これからは怪塔の主に、あたまをおさえられていなくてはなりませんからねえ。こんなところへ来て、われわれが捕虜ほりよか奴隷どれいのようになるのはいやなことですよ」

「わたくしは、あの怪塔が、急に大爆発を起すのではないかと思えますの」
とスマイレ女史が語る。

「なんのための爆発かといいますと、火星の地質をしらべるためだと思えます。あれを発

射した者は、遠くから爆発のおこったときにどんな色の火が出るか、どのくらいの時間燃えるかなどと、いろんなことを観測しようと思つて、用意しているんだと思いますわ。もちろんそれは、やがて彼らが、この火星へ移住して来るための準備作業だと思えますわ」「なんとかして、一刻も早く、相手の正体をたしかめる方法はないものかなあ」

マルモ隊長は、隊員をひきいている責任上、そのことを知りたいのだった。危険ならば、一刻も早く隊員をまとめてこの火星を去ることにしたい。あの怪塔を探検して、こんどの宇宙旅行のおみやげをふやしたい。

「そうだ。いいことがあります」

とカンノ博士が、目をかがやかした。

「いいことは、なにかね」

「隊長。あの水棲魚人と問答を試みたいと思います。つまり、水棲魚人は、あのような怪塔をはじめて見たかどうか、それをきいてみましょう。たびたび、あんなものが落下して来たのならそれがどんな仕掛のものであるか、どんなことをするものであるか。それが知れると思います」

「それは名案だ。さつそくきいてみるがいいが、そんなことが出来るのかね」

「それはできません。私とスミレ女史じよしとで、この間から水棲魚人と、思っていることを話し合う研究を完成していますから、大丈夫です」

そこでカンノ博士とスミレ女史とは、装置をかついで、水棲魚人の大ぜい集まっている沼のところへ出かけた。正吉も、このことを聞いて、おじさんのモウリ博士といっしょに、一行に加わって行った。

その会見の光景は、ふしぎなものであったし、また記録すべきものであった。

人類と水棲魚人の頭脳の中におこる脳波をとらえて、装置が、相手に分るような脳波に直して、相手に伝えるのであった。だから、口をきかなくても、ただ、相手に聞きたいことを、頭の中で思うだけでその質問は相手に通じた。

相手の方でも、それをことばで返事を頭の中で思えば、それで通じるのであった。

水棲魚人は、人類よりもずっと劣れつと等な生物だったから、こみいったことを返事することはできなかった。それだから、水棲魚人から返事をとることは成功したが、人間同士の話のようには、はつきり通じなかったのは、やむを得ない。ともかくも、水棲魚人がこたえた要点を、次にしるしておこう、

「あんなものは、はじめて見た……空を、あんなものが一つか二つとぶのを見たことはあ

るが、あんなにたくさんとんできたのは、はじめてだ……いつまでも、全体があんなに光っているものを、今まで見たことはない……一つか二つでとんできて、その中から生物がぞろぞろ出てきたことは、今までにもある。君たちも、その一例だが君たちではなく、もつと身体の形のちがった者が来たこともある。彼らは、ながくいなかった。みんな帰ってしまった……彼らは、われわれの仲間をつれていった。それつきり、帰ってこない。君たちは、そういうわるいことをしないようにしてくれ……めずらしい、うまいたべものをたくさん、われわれにくれ……」

水棲魚人からはこんなことしかきくことができなかつた。

しかしこのかんたんな返事の中からも、重大な発見がいくつかあつた。

すなわち、光る怪塔は、はじめて見るものであるということ。

人類以外の生物が、今までに、この付近へ着陸したことがあること。

この二つは、非常な重大なことであつた。大警戒が必要となつた。あの怪塔から、人類以外の生物がとびだしてくる可能性は十分にあるのだ。そのときマルモ探検隊が最悪の危機をむかえることは、今さら覚悟をあたらしくするまでもないことだつた。

このへんで、マルモ隊長は、はらをきめなくてはならない。

意外な正体

ついに、決死の偵察隊が、光る怪塔のところへ派遣はけんされることになった。

その人選は、マルモ隊長がした。

カンノ博士が偵察隊員に任ぜられた。

それからカコ技師に、タクマ機関士、それに正吉少年の四名だった。

ところがコツクのキンちゃんの、ぜひつれていってくれといってきたきかない。ことに、彼は正吉少年の身の上を心配して、正吉が行くところへは、ぜひ自分を護衛ごえいしや者としてやつてくれと、隊長へ熱心にねがった。

そのあげく、キンちゃんの願いは、ついにゆるされた。正吉とキンちゃんとは大よろこびで抱だきあった。

「それでは、行ってきます」

と、カンノ博士は、さすがに顔をかたくして、マルモ隊長以下に別れのことばをのべた。「成功をいのる。みんなの運命が、君たちの行動にかかっているんだから、自重じちようしてくれたまえ」

マルモ隊長は、そういつて、目をまたたいた。

一行五名は出発した。

のこる隊員は、やはり怪塔への監視をゆるめなかった。もし塔内から何者かあらわれた場合にはすぐ信号をもつて、カンノ偵察隊へ知らせることに、手はずができていた。

だが、怪塔はしずまりかえっていた。いつまでたつても、ネズミ一匹も出てこなかった。それだけにますます気味がわるくてしようがなかった。

あまり遠い道のりでもないので、カンノ博士一行は、やがて光る怪塔に近づくことができた。

そばへよつて見ると、いつそうすばらしい建造物であった。

しーんとしている。ただ塔は、青白く光っている。

塔のまわりをまわった。塔には、窓もないし、入口らしいものもない。ただ円柱えんちゆうがより集まって、高い塔をつくっているだけだ。

「文字みたいなものがありますね。一階が二階につくところですよ。たしかに文字だ」
そういったのは、正吉だった。

それは装飾そうしよくのように見えた。しかし、正吉のいったように、文字だと思ってみると、文字のようでもあった。アルファベットなのである。

「なるほど、これはふしぎだわい」

カンノ博士も、急に目をかがやかせて、それを見上げた。

文字は、へこんでいた。それが熱のために摩滅まめつしたと見え、文字として残っていたのだ。
「なんの文字？ 人間の使う文字かい」

キンちゃんが正吉の腕をゆすぶる。

「アルファベットだよ。人間の使う文字だ」

「そうかい。なんだ、おどろかさされたね。それじゃ、この塔は地球からとんで来たものじゃないか。中には、うんとごちそうが入っているんだろう」

キンちゃんは、ずばりといった。

まさか——と、正吉は思ったし、カンノ博士たちも、そこまでは考えなかった。
ところがキンちゃんのいったことはだいたいの中しかったのだ。

文字を読んでみると、次のような文章になった。

「マルモ探検隊に贈る。この資材を有効に使って、大探検に成功せられるよう祈る。ニューヨーク市マンハッタン街、世界連盟本部科学局より」

読み終って、カンノ博士たちは、へたへたとその場にしりもちをついた。それは緊張の頂上から、安心の谷へ、一度に落ちたからであった。

他の遊星と出会いおそろしい争闘がはじまるものと覚悟して、おそろおそろ近づいた光る怪塔は、そのような恐怖すべき危険なものではなく、そのあべこべのものであったのである。まったくそんなことを予期もしていなかったのに、マルモ探検隊のことを心配して地球上から見まもってくれていた世界連盟本部からの温かい貴重な贈物だったのである。救^き済^{ゆうさい}物資^{ぶつし}がいっぱいはいっている塔だったのである。食糧、衣料、燃料、機械工具などいっぱいいつまっている。飛ぶ倉庫だったのである。アメリカの持つすぐれた科学技術だ。一本一本の円筒^{えんとう}の中に、それらのものがいてねいにはいつていた。もちろんそれを開く方法も記されてあった。

キンちゃんの第六感^{だいろくかん}は、するどく命中したのであった。

「キンちゃんは、すごいんだね。見直したよ」

と正吉はキンちゃんの手を握って振った。

マルモ探検隊は、これらの物資を十分に有効に使い、それから三ヶ月間火星に踏みとどまって火星の探検を十二分に果たし、その翌年早々無事に地球へ帰還した。

もちろん一行は大歓迎を受けたが、隊長以下は休むひまもなく探検報告のため、各地を訪問した。

正吉もキンちゃんも、いつも一行に加わっていた。正吉はマルモ隊長の秘書をつとめ、キンちゃんはあいかわらず、一行のためにおいしくて栄養たっぷりの食事を用意するのを仕事にしていた。

マルモ隊長は、報告の最後のところを、かならず次のようなことばで結ぶのであった。「われわれ地球人類は、このさい急いで大宇宙探検計画をたて、一日も早くそして一人でも多くその探検に出發するのでなければ、やがて他の遊星生物のためにお先まわりをされてしまつて、地球人類の発展はきゆうくつになるおそれがあると信じます。

世界の人々は今すぐにも手をとりあつて、この重大なる仕事にかかりたいものです」さすがにマルモ隊長は、未来をよく見ている。地球人類の繁栄は、たしかにマルモ隊長の指し示す方向にある。それを早くさとして実行にうつすのが、世界人だ。少年少女たち

は、やがてかならずこの重大な仕事につくのだから、今からいつそう勉強しておかなくてはならない。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日初版発行

初出：「少年読売」

1948（昭和23）年3～12月

入力：tatsuki

校正：松永正敏

2001年7月17日公開

2007年8月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三十年後の世界

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>